主要地方道大社日御碕線
中山工区特別県単(改良)工事
に係わる発掘調査報告書

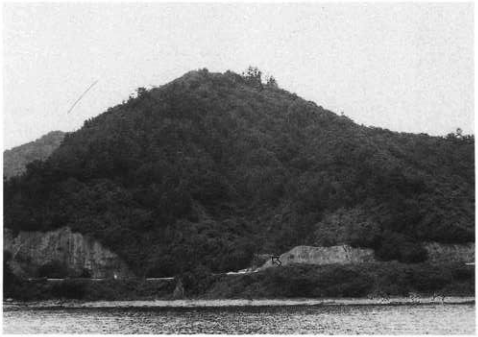
ひろげ遺跡

1997年3月

島根県

大社町教育委員会

遺跡遠景（南海上より望む）



遺跡近景

序　　文

このたび、主要地方道大社日御碕線中山工区（改良）工事に伴い、本工事予定地内に所在する「ひろげ遺跡」の取扱いの協議を受けました。協議の結果、遺跡の実態の把握と文化財保護の検討のため、施工予定区域を対象とした発掘調査を実施しました。

ひろげ遺跡は昭和41年同線拡幅工事の際に土器等が出土して発見されたものですが、その性格は必ずしも明確とはいえませんでした。

このたびの発掘調査の結果、夥しい出土土器は全て破砕されており、石組みや浜石・浜砂利が散乱し、仰ぎ見る山陵には岩頭が列をなすなどの状況から、古代において海浜を生活拠点とする人々の祭祀の場であったことが指摘されました。

この成果は、ひろげ遺跡の性格を窺い知る上でたいへん意義深いものであると同時に、今後当町のみならず地域の歴史を紐解く上でも大いに活用していただけるものと確信いたしております。

最後に、今回の調査及び編集にあたり島根県出雲土木建築事務所をはじめ関係各位から深甚なるご理解とご支援を賜りました。また、島根県教育委員会文化財課から懇切なるご指導、ご助言を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成９年３月

大社町教育委員会
教育長　阿　部　和　男

例　　言

1．本書は大社町教育委員会が島根県出雲土木建築事務所の委託を受けて、平成８年度に実施した主要地方道大社日御碕線中山工区特別県単（改良）工事に伴う、ひろげ遺跡の発掘調査報告書である。

2．所在地　島根県簸川郡大社町大字日御碕956－2番地

3．調査体制は次のとおりである。

調査主体　大社町教育委員会　教育長　阿部和男
調査指導　西尾克己（島根県教育庁文化財課主幹）
　　岩橋孝典（島根県教育庁文化財課主事）
調査担当　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）
調査員　藤原友子（三刀屋町文化財専門委員）
調査補助　大梶智徳（大社町教育委員会主事）
　　藤井和久（多伎町立多伎中学校教諭）
調査作業　祝部儀三郎　春木英男　中山久夫　秦芳正
　　小川年秋　大家弘　足立勝司　馬庭孝司
　　落合進
事務局　大社町教育委員会　影山雅夫　加村健悟
調査期間　平成８年７月29日～平成８年９月２日

4．　本書の編集は杉原・藤原が行い、執筆は杉原清一・大梶智徳が分担し、文末に氏名を記した。また、挿図の浄書は藤原友子・大梶智徳が行った。

5．年代測定及び出土資料の分析は次のように依頼した。その成果は年代の特定には到らなかったが、報告は本書に付編として収録した。

地磁気年代測定　島根大学　総合理工学部　教授　時枝克安

6．本書に掲載した地形図等は、町所管の地図による。

7．図中の方位は国土調査法による国土座標第Ⅲ座標系による。

8．本遺跡出上遺物及び実測図、写真は大社町教育委員会で保管している。

9．調査にあたっては次の方々から助言、協力を賜った。記して謝意を表す。

島根県出雲土木建築事務所
大社小学校
宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター長）
石田克久　石田善蔵　大国貴利

目　　次

扉写真　－遺跡遠景－

序　文

Ⅰ　地理的・歴史的環境 …… （大梶）　1

Ⅱ　調査に至る経緯と経過 …… （大梶）　3

Ⅲ　発掘調査の概要 …… （杉原）　6

1　調査区の設定 …… 6

2　調査方法 …… 6

3　遺物包含層 …… 10

4　遺構 …… 10

石組み遺構　土器溜り状遺構　焚火跡　遺物の分布状況

Ⅳ　遺物 …… （杉原）　17

1　器台 …… 17

2　壷・甕形土器 …… 20

3　平底底部 …… 26

4　把手等 …… 26

5　施文破片 …… 26

6　高坏 …… 28

7　低脚坏 …… 31

8　小形壷・埦 …… 31

9　かまど等 …… 33

10　須恵器 …… 33

蓋坏　壷・甕等

11　石器器 …… 36

Ⅴ　まとめ …… （杉原）　38

1　若干の指摘事項 …… 38

2　結び …… 40

付編　ひろげ遺跡の焼土の熱残留磁気測定…島根大学総合理工学部物理科学科　時枝克安……42

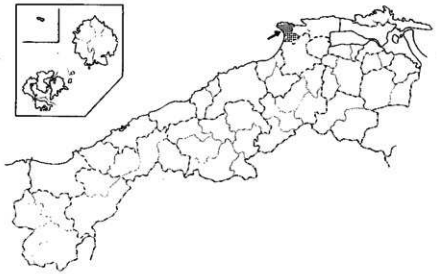
目的　試料　測定結果　交流消磁　結論

挿図表目次

図1　周辺の遺跡 …… 1
2　遺跡とその周辺の地形 …… 3
3　試掘地点と調査区配置 …… 4
4　縦断トレンチ …… 7・8
5　横断トレンチ …… 7・8
6　遺構平面図 …… 9
7　X1遺構 …… 11
8　X2・X3遺構 …… 12
9　X4遺構 …… 13
10　新・古様式土器の分布 …… 16
11　器台 …… 17
12　壺・甕形土器（1） …… 21
13　甕形土器（2） …… 22
14　甕形土器（3） …… 23
15　甕形土器（4） …… 24
図16　甕・釜形土器（5） …… 25
17　平底底部 …… 25
18　把手・その他 …… 25
19　施文破片 …… 27
20　高坏（1） …… 29
21　高坏（2） …… 30
22　低脚坏 …… 31
23　小形壺・埦 …… 32
24　かまど等 …… 33
25　須恵器（1） …… 34
26　須恵器（2） …… 35
27　石製器 …… 37
28　器種別の推移 …… 39
表1　出土遺物集計表 …… 15
2　実測遺物一覧表 …… 18・19

図版目次

PL1　調査地点
2　発掘状況
3　遺構部分等
4　器台　壺・甕形土器
5　甕・釜形土器　平底底部　把手等
PL6　施文破片　低脚坏　小形壺・埦
7　高坏
8　須恵器
9　石製器



Ⅰ　地理的・歴史的環境

島根県簸川郡大社町は、出雲平野の西北端にあたり、日本海を臨む位置にある。大字日御碕は、町の中心部である大字杵築の北西にあたり、その殆どは北山山脈で形成され、平野部はごく僅かである。また、その海岸線は岩石海岸であり特に北山山脈北部は複雑に入り組んだリアス式海岸を形成している。

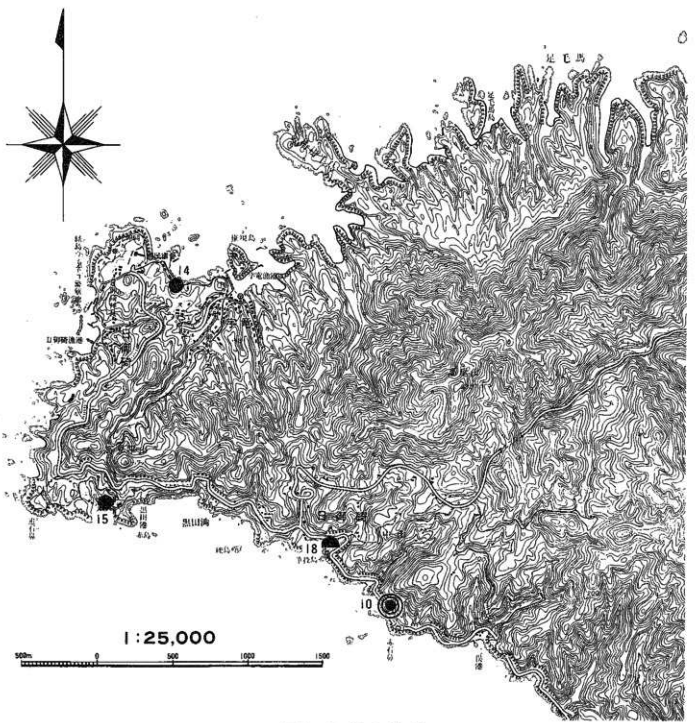


図1　周辺の遺跡

ひろげ遺跡（10）※2は、大字日御碕字川井戸に所在する遺跡で出雲大社と日御碕神社を直線で結んだ、ほぼ中央に位置する。南側は主要地方道大社日御碕線に隣接し、眼前には日本海が広がる。背後並びに両端には急峻な山陵が連なり、この遺跡はそれに囲まれた谷の部分にあたる。近世にはこの地は農作地として利用されてきたようだが、現在は草木が繁り荒廃化している。

土質について言及すれば、廻りの山陵は頁岩を母岩として形成され、頁岩の風化した粘質の土砂が谷へ流れ込んでいる。それは、谷から山裾に近くなるほど粘質化の傾向がより顕著になることもそれを裏付けていると言える。

本遺跡は昭和41年大社日御碕線拡幅工事の際に古墳時代の須恵器等が出土したことによって発見されたものであるが、その性格は必ずしも明確ではなく遺物散布地とされていた。

歴史的背景からいえば『出雲国風土記』※1に依ると、当時杵築の南方には、出雲大川（現在の斐伊川）・神門川（現在の神戸川）の支流に「神門水海」と呼ばれる周囲35里74歩（18.84㎞）の入海があり、絶好の港をなしていたと言われている。このことは、「神門」の地名を「神門臣伊加曽根が時に神門貢りき。」という故事に由来するとされているが、本来「門」は「水門」の「門」であり「杵築の聖地をひかえた港」の意味であったと解されている。風土記では出雲大川に関して「孟春より起めて季春に至るまで材木を投る船河の中を沿泝る。」と記しており、水海から川にも船が通う港であったことを裏付けている。これによって言えることは、北山山麓が海上交通における道標ではなかったかと考えられる。特に、本遺跡の背後の独立山陵は海上からのみ整った姿を臨むことができ、その山陵から遺跡の上に張出す稜線上には岩頭が列を成している。このような状況は、神名樋山的特徴を示している。

日御碕神社付近には、祭祀に関わる地名や地形が多く存在する。例えば、日御碕神社あたりには、神事山、焼山、幸神山、経島などがあり、その付近には高門、亀恵比寿、鬼ノ目、ひろげ、などがある。

周辺の主な遺跡には、本遺跡と立地条件の似た遺跡として黒田遺跡（15）がある。その他、近くにはおわし遺跡（14）、高天原古墳（消滅）（18）※2があるが、何れも古墳時代の遺物が少量出土していることが知られるにとどまっており、詳細は明らかになっていない。

（大梶智徳）

（註）

＊1　733年（天平5年）に編纂された出雲国の地誌である。

＊2　番号は島根県遺跡地図（1993）による。

Ⅱ　調査に至る経緯と経過

主要地方道大社日御碕線は大社地区と日御碕地区を結ぶ唯一の道路であり、地区住民の重要な生活道路であると同時に日御碕を訪れる観光客を迎える観光道路としても重要な役割を果たしている。しかしながら硯水隧道・赤石隧道・二俣隧道付近は狭小のうえ急カーブになっており、車両の交差は普通自動車がやっとで、大型バスが通過する際には度々交通渋滞が起きている現状である。大社町はこれを憂慮し、県道であるこの路線の現状を島根県へ再三にわたり陳情してきた。その結果、島根県は平成７年度に主要地方道大社日御碕線中山工区特別県単（改良）工事を計画し、工事予定地内における遺跡等の所在について出雲土木建築事務所から大社町教育委員会へ照会があった。工事予定地内に所在する「ひろげ遺跡」はⅠ章でも述べたとおりその性格や遺跡の範囲についても明らかになっていなかったことから、路線区域を中心に遺跡の範囲等の確認のため試掘調査を行うこととした。

試掘調査は島根県教育委員会文化財課　岩橋孝典氏の指導のもと、平田市教育委員会生涯学習課　原俊二氏の協力を得て、平成８年４月23日・24日の２日間行った。その結果、次のとおり報告があった。

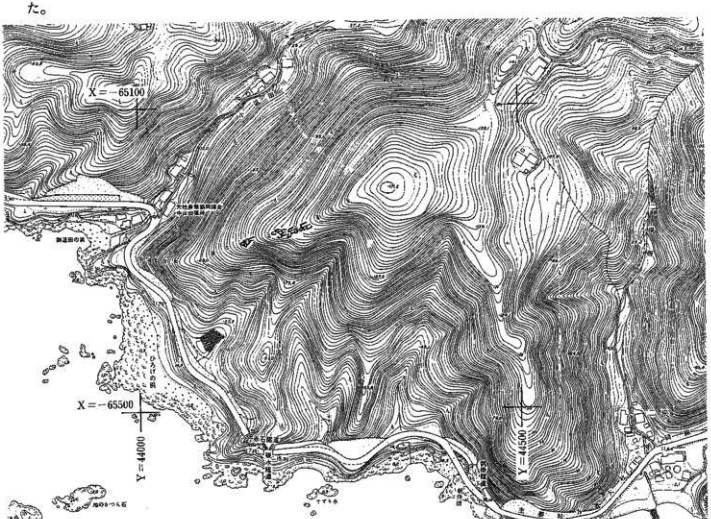


図２　遺跡とその周辺の地形

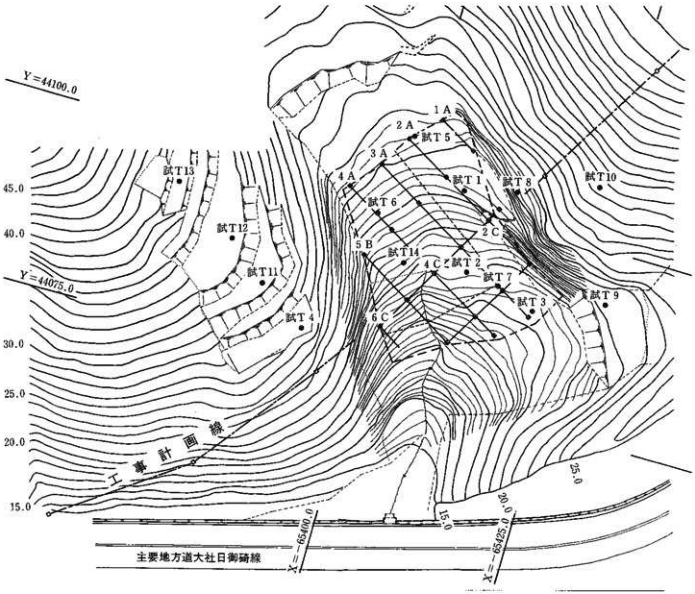


図3　試掘地点と調査区配置

試掘調査の概要（図3参照）：工事予定地内における急傾斜、草木の繁茂している箇所を除いた場所に1.5m×1.5m前後のトレンチを北側丘陵テラスに4箇所、谷部に8箇所、南東側丘陵斜面に2箇所の計14箇所設定した。このうち、南東丘陵斜面に設置した第8トレンチと、谷部の第2、3、7、9、14トレンチの6箇所で、弥生時代から奈良時代にかけての土器片が出土した。遺構は検出できなかった。

これら以外のトレンチは0.3mから0.7mの深さで地山となり、遺構・遺物ともに発見できなかった。なお、県道から谷に入る道で、須恵器片を少量採取している。ここで土器片が出土したトレンチについて記しておく。

第8トレンチ　0.7mより遺物包含層である。1.0mまで掘り下げたがまだ続くようである。土器片が少量出土した。

第14トレンチ　0.4mより遺物包含層である。これより下には掘り下げていない。土器片が少量出

土した。

第2トレンチ　0.5mより遺物包含層である。これより下には掘り下げていない。土器片が多く出土した。

第7トレンチ　0.4mより遺物包含層である。0.7mまで掘り下げたがまだ続くようである。土器片が多く出土した

第3トレンチ　0.5mより遺物包含層である。これより下には掘り下げていない。土器片が多く出土した。

第9トレンチ　0.6mより遺物包含層である。1.6mまで掘り下げたがまだ続くようである。土器片が最も多く出土した。

試掘調査は短期間ということと遺跡の範囲を確認することが目的だったことから、遺物が出土することを確認し、完掘は行わなかった。北側丘陵は急傾斜であり、遺跡が存在する可能性は低く、遺跡の範囲については第8、9、14、トレンチを結んだラインより県道側と考えられる。

以上の結果から、計画路線は遺跡の範囲内であると判断し埋蔵文化財の保護の検討と、遺跡の実態の把握を目的として、出雲土木建築事務所の委託を受け大社町教育委員会が工事区域内の遺跡の部分について平成8年7月29日から8月30日にわたって発掘調査を実施した。調査担当には、杉原清一氏（日本考古学協会々員）に依頼し、承諾を得た。

調査の結果、当町でも余り類例のない弥生時代から奈良時代にかけての祭祀遺跡であると指摘されるところとなった。

この成果をふまえて遺跡の取扱いを協議した結果、本工事の公共性に鑑み記録保存にとどめることとした。

以下、経過を列記する。

H7．7　出雲土木建築事務所より道路の改良工事概要について説明あり。文化財調査について協議を開始する。

H8．4.23　試掘調査開始

4.24　試掘調査終了

5.24　発掘調査事前協議（県文化財課・出雲土木建築事務所・大社町教委）

6.20　県教委に発掘調査の実施について通知（申請）
調査体制および調査準備開始

7.18　出雲土木建築事務所と委託契約締結

7.29　発掘調査開始

8．7　県教委調査指導（西尾克己氏）

8.12　地磁気年代測定分析依頼（時枝克安教授）

8.23　県教委調査指導（西尾克己氏）
8.26　地元聞き取り調査（石田克久・石田善蔵両氏の談）
　　遺物整理作業併行開始
8.30　発掘調査終了
9. 4　県教委及び出雲土木建築事務所へ調査概要報告書提出
　　遺跡の取扱いについての協議書を県教委へ提出
9. 6　遺跡の取扱いについて県教委より回答
9.18　遺跡の取扱いについて出雲土木建築事務所へ通知

以後随時、報告書及び補充調査について協議し、報告書作成作業を進めた。

（大梶智徳）

Ⅲ　発掘調査の概要

1．調査区の設定

発掘調査は事前の分布・試掘調査によって特定された範囲について行うこととした。

道路改良施工計画の基準杭を参考に調査区を設定し、ほぼ東西方向（谷傾斜方向）各5m間隔、直交する谷横断方向は各8mとし谷奥上端は地勢に応じて変えた。そして区の呼称は東から第1～6とし、南谷奥からA～D段とした。従って縁辺の区分では発掘面積が異なることになる。（図4・5）

2．調査方法

事前に地形の実測を行った後、試掘成果から厚い表土層中には遺物等がなく、その下に遺物包含層があることが判っていたので、先ず全面にわたって表土を除去し、その後調査区に沿ったトレンチによって遺物包含層やその下面を検討した。そして遺物包含層中には遺構が見当らず、谷奥や上方山腹からの流入堆積であることが判ったので、この遺物包含層の大半を先ず取り除いた。これについては状況からしてA～C区の区分は意味がないものとみて、D区を除く1～6区の区分のみで遺物を採取した。そして以降は区毎に精掘を遺構等の認められる面まで行った。

現地は頁岩を母岩とする急峻な地形の谷間であることから、小砂利状に風化した岩屑から成る細礫質粘質の堆積土であり、乾くとコンクリート状になるなど発掘作業は極めて難渋した。

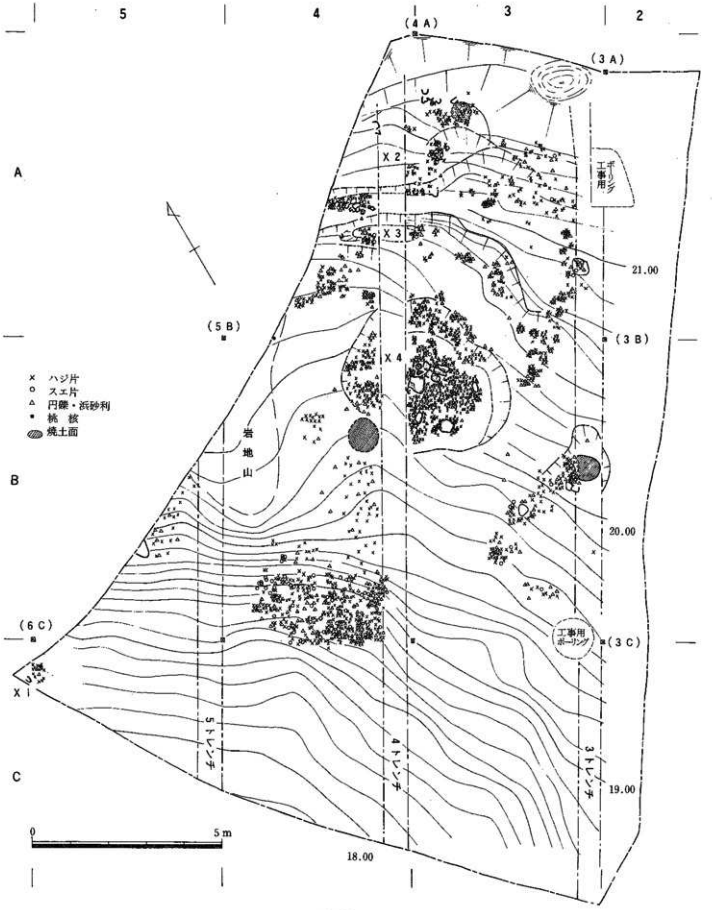

5
4
3
2
A
B
C
(4A)
(3A)
(5B)
(3B)
(6C)
(3C)
X1
X2
X3
X4
ボーリング
工事用
21.00
20.00
19.00
18.00
岩地山
工事用ボーリング
5トレンチ
4トレンチ
3トレンチ
× ハジ片
○ スエ片
△ 円礫・浜砂利
■ 桃 核
焼土面
0
5m

図6 遺構平面図

3．遺物包含層

調査地点の土層についてみると、後世畑地として拓かれた時の盛り均し土が厚いところでは40㎝以上もあり、等高線状に若干の段差のある傾斜面の地表であった。そして谷中間から下方の浜へ向かって石で縁取りした水路があり、果樹園の廃木株が処々に残っていた。

表土の下にはにぶく暗色がかった土層があり、これには多くの土器片等が包含していた。この遺物包含層も部分により厚さが異なり、また幾層にも明色で薄い間層があるなど、谷奥方向や両側山腹からの崩落流入土が漸次堆積したことによって成っている事が判った。そして西寄り１区では母岩地山まで極く浅く、遺物等の含有は極めて少なかったが、西寄り山際部の４Ａ・５Ｂ・６Ｃ区では同様に土層は浅いものの遺物は多数であった。また、谷中央部ではこの土層の厚さが１ｍを越えるところもあった。

なお、この遺物包含層は谷奥方向の調査区外へも連続していることも判った。

遺物包含層の下面と遺構面との区別は見極め難いこともあって、遺物包含層として取り上げた遺物は概ね層位の下面近くまでのものである。この包含層の中にも時期の異なる遺構の存在も考えられたが、確認し得なかった。

包含層から採取した遺物は、土器はすべて破砕した細片であり、石礫類では山礫も多数散在したが崩落堆積のものと区別はできなかったので、浜から搬入した円礫類のみを対象とした。このようにして採取した遺物は土器片総数約10,000点、石礫類1,200点余であり、土器は概ね弥生時代後～末期から奈良時代にいたる期間のものであり、出土レベルの高低による新古は認められず、全層に混在した。

なお、谷下方の水路縁辺（３Ｃ・４Ｃ・５Ｃ区）では、特に須恵器片の含有率が高いように思われた。

4．遺　　構（図６）

1）石組み遺構（祭壇構造）

調査区域の西側山裾にほとんど接するあたりに、小段状或はテラス状の面を造り浜石等を配置するもので、Ｘ１（６Ｃ区）Ｘ３（Ａ４区）がそれであり、テラス面は明瞭ではないがＸ２（３Ａ区）もそれに準ずるものである。

Ｘ３からＸ１までの間の４Ａ区も同様の地形が続いており、遺構の存在も思われたが確認できなかった。

Ｘ１遺構（図７）：山裾の傾斜変換点あたりに母岩面に達する粗略な小削平面を造る。この西隣接には瘤状に張り出す岩塊があり、これも関与しているのかもしれない。

遺構はわずかな窪み様地面の55×60㎝の範囲で、風化した母岩が凹凸しており、その間には土が入っている。これら地山の小岩塊の間に折損した大きい石皿を中央あたりに据え、隣には拳大の凹石も並べて置いている。

これら石礫間には主として土師器の破片が散乱している。破片はかなり細かく砕かれたもので、

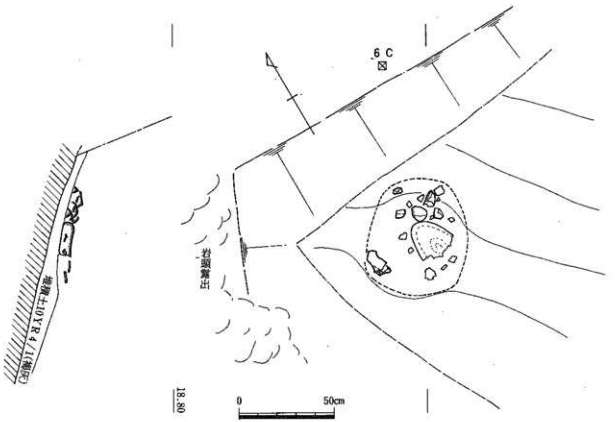


図7　X 1 遺構

そのうちには手捏ねの小壺や高坏片・複合口縁（小谷期）の口縁や、外面を磨いた甕胴片等が認められた。

この遺構から南西の谷間に向かう斜面の上層には土器片が濃密に包含していた(表1　6C区参照)。しかし新古が混在していて、直接X1遺構に伴うものと断定することはできなかった。

X2遺構（図8）：調査区の西奥部近くで、地面の加工は認められないフラットな地面に大きさ15～20cmの山石が4個置かれ、赤く変色した山石3個が30cmほど離れて散乱し、その前方には炭灰が散布し、微細な炭片はさらに下方斜面まで点々と認められた。その上端付近で直径60cmの地面は熱を受けて変色していた。この状態は山石を組んで焚火が行われたことを示している。

この面一帯には土器片や若干の浜砂利が散布していた。土器片は土師器片が多いが、須恵器の大甕片や赤彩の高坏片或は複合口縁なども含まれている。その約1m下方斜面には器台や高坏の破片等が散らばっているが、この遺構に伴うか否かは不明である。

このようにX2遺構は山石を用いた配石と、石を配した焚火跡、そして浜砂利を用い、土器を破砕する行為の認められる遺構である。

X3遺構（図8）：この遺構はX2遺構から山裾に沿って約2m下がった位置にあり、等高線に沿って2段の段階状に削り出した遺構である。上段は幅約2,5m、奥行き約60cmのテラスで、削り下ろした奥壁は高さ25～30cmである。中ほどから左（北西）側は、地山石と同じ頁岩の平らな石を前端が直線になるように粗雑に敷いている。

これら石敷き面やその縁辺には浜石（図27－25・26）や多数の土器片が散布していた。赤彩した高坏脚部（図20－5）など土師器を主とするが、須恵器の甕片や蓋片（Ⅲ・Ⅳ期）などがある。ま

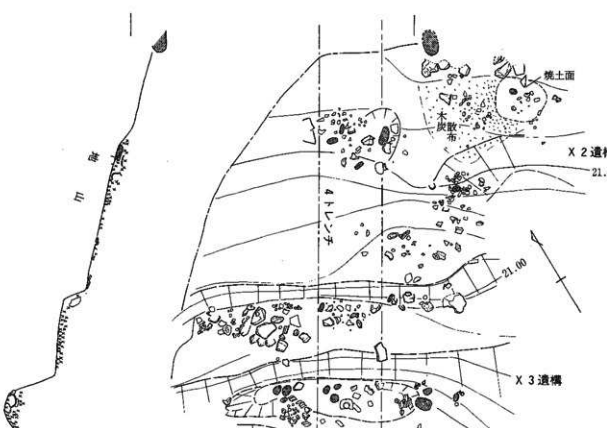


図８　X２・X３遺構

た少し浮いて小形丸底坩（図23－１）もあった。

下段も斜面をＬ字状に削り出した段状のテラスであり、奥壁下に小溝が副う。テラスは幅約２ｍ奥行き55㎝の面で、上段との段差は約30㎝であり、奥側小溝には拳大の浜円礫が並べて置かれ、その前方テラス面に壷や甕形土器の破片（複合口縁片（図12－１・21・25・図14－78・93）を含む）や浜砂利・火山浮石２点もあった。

このようにＸ３遺構としたところは２段の階段状テラスに浜石・山石を置き、その上に破砕した土器片が散乱するものであり、密着した破片から弥生時代末～古墳時代初期かと推察される祭壇様の遺構である。

２）土器溜り状遺構

Ｘ４遺構（図９）：調査区のほぼ中央部で、略小判形３×４ｍほどのやや窪みをなすところである。奥壁部は傾斜の削り出した面であるが、窪みの部分は自然地形のままと思われる。この中央あたりには大きさ50～60㎝の大きな山石２個とやや小さな石５個が少し浮いてひとまとまりになっている。据え置いたのではなく、若干土が堆積した上へ山腹から転落したものを寄せたもののようである。

この大石の間や付近は夥しい数の破砕された土器片や浜石類が集積していた（39頁の表参照）。

図9　X 4 遺構

口縁帯に条線や擬凹線があり、肩部には条線と波文を描く複合口縁の破片多数（図13－42・50・64・65・67・図14－72・79・88）や小形坩（図23－15）、低脚坏（図22－6）、高坏片（図21－44・68）器台片（図11－16）など、又数は少ないが須恵器の破片もある。礫石器では凹石・敲打石（図27－15・21）などがある。奥側斜面には浜砂利が密に散布していた。

このX 4 には格別の石組みとか、祭壇のような構造は認められなかったが、中央にある大石群をそのまま利用した祭祀の場ともみられ、或は付近からの遺物の転落流入や池状をなすことから、逐次投入されたとも考えられる。

またこの遺物集積の西縁部には直径45cmほどの円形の地面が焼けて赤変していた。焚火の跡と思われるが、木炭片は顕著ではなかった。

遺物薄り部：上記した以外に遺物のやや密に分布するところがある。

谷間のほぼ中央線にあたる3A～3B区を谷奥から下るY字形帯状の分布が認められる。この部分

は等高線では表現できなかったが、わずかに窪む帯状地形であることから自然流下のみちすじにあたると思われ、それに伴って付近や谷奥方向から転入堆積したものとみられる。

またX４遺構から前方約５ｍの地面傾斜が急になるあたり（４Ｂ区）斜面一面に遺物の分布がやや密であった。この斜面の上方は地山が母岩質であり、ここは遺物包含層が薄かったことから、この面から自然転落流下した遺物が斜面に集積した結果とみられた。

須恵器についてみると、出土総数は極く少ないが谷入口近く南東へ曲がる小支谷入口部（３Ｄ区）に炭灰と共にまとまって集積する個所があった。新しい様相の壷・蓋坏類（図25－８・27・図26－46～48）がみられる。

また、包含層に比較的多く認められたのは水路の北縁にあたる５Ｃ区で、蓋坏（図25－３・４・12・13・18・20）、６Ｃ区では高坏（図25－31・35・37・38）などが採取された。

その他：炭化した桃の核が２点採取された。その一つは上記の遺物溜り部（３Ａ区）であり、他の堆積土器類と共にあった。他の一つは北西山裾部で５Ｂ杭に近い位置である。これも包含層下層部に混在していた。このように自然炭化した桃核は二つとも遺構には伴ってはいなかった。

３）焚　火　跡

調査範囲において焚火跡が３か所認められた。Ｘ２遺構及びＸ４遺構については上記した通りである。他の１か所は３Ｂ・３Ｃ杭の中間地点（３トレンチ内）にあった。谷中央により北東側で、地面傾斜が急から緩やかに変わる地点で、深さ３～10㎝、直径70㎝ほどの不整円形中窪みとしたもので、地面は熱によって赤変している。

伴う遺物は明確ではないが、赤く焼けた山石や浜石を付近から採取しており、これらから石を配置して焚火を行ったところと思われた。また前方地下り部分には遺物のやや密に散布する面が続く。

なお、３か所の焚火跡のうちこの地点が最も強く熱変色していたことから、依頼して考古地磁気年代測定（付編参照）を行ったが、データの分散が大きく不成果であった。その原因は“二次的磁化”ではなく“攪乱”によるものとの報告であったが、現況では焼土層の掘り返し等は認められないので焚火以降において踏圧等によって部分的に地面が変動を受けたのであろうか。

４）遺物の分布状況

採取した遺物は土器・石礫器・浜石がほとんどである。

土器はすべて細かい破片のみで完形のものは全くない。弥生後期以降から律令期に至る間のもので土師器が最も多く、須恵器は破片数で５％以下であった。

石礫器類はすべて浜石の円礫で、加工痕のあるものでは石皿・凹石・敲磨石類であるが、加工痕のない自然石礫や浜砂利は夥しい数にのぼるので抽出して採取した。

このほかに桃の種核や軽石（火山の浮石）、かまど片なども数点採取した。

土器片は特徴のある部分や器種・塗彩などにより、石礫については単なる浜石や整った形状の円礫・

表1　出土遺物集計表

		土師器												須恵器							石礫器										計
		壺口	甕口	胴片	平底	高坏	器台	赤彩	鍛冶	手捏	厚手	不明	他	蓋坏	大甕	壺口	甕	高坏	不明	他	浜石	円礫	軽石	砂利	凹石	石皿	棒石	叩石	磨石	焼石	石錘	他	
包含層上～中位	2区	14	5	84		11	11	21	2		1	213		3	2	1		4			15	7		22	2	5	10						433
	3区	70	45	114		109	14	67	1	1	10	513	2	17	24	1	2	7	8		10	9	2	13	2	13	10	1		7	1		1,073
	4区	131	41	287	3	63	26	167			15	951	1	56	10		1	20	49		94	8	1	54	9	21	39	2		3	2	1	2,055
	5区	32	19	232	2	41	7	55		5	6	265	1	9					5	1	3	7		12		2	10					1	715
	6区	17	32	133		17	5	101				410	6	20	16	3	4				1						1						767
	計	264	142	850	5	241	63	411	3	6	32	2,353	10	105	52	5	7	36	58		123	31	3	101	14	41	70	3		10	3	2	
		土師器											4,379	須恵器						263	石礫器											401	5,043
包含層下位～遺物面	2区	A	6	3				2				50																					61
		B			1							6									2			1								10
		C	1	8	11		1				3	40		1										1								66
		計	7	11	12		1	2			3	96		1							2			2								137
	3区	A	53	18	149	2	56	11	58			2	397	3	5	2			1	1		13	10		172	1	2	11			1		繊維	878
		B	122	7	211	6	56	24	11	1		1	621	4	7	7			1	1	2	29	17	3	172		7	13	1				1	1,325
		C	11	3	11	1	11	1	3			4	208		11							4			10		2	1					281
		D	4	3	10		2		4				31		21	10			1						3	1		1	1				92
		計	190	31	381	9	125	36	76	1		7	1,157	7	44	19		2	3	2	46	27	3	357	2	9	27	3		1		1	2,576
	4区	A	76	16	146	6	35	11	95		2	2	501	6	10	7		1	16	1	5	9	5	60	1	3	3	1					1,018
		B	161	36	262	6	70	32	153	1	3	7	1,117	3	12	17			1		28	11		103		15	21			2	2		2,063
		C	8	5	78		7	3	6		2		68	5	17						4	5		1		6	1		1				217
		D	3				2		2				6														1						12
		計	248	57	486	12	114	46	256	1	7	9	1,690	14	39	24		1	17	1	37	25	5	164	1	24	26	1	1	2	2		3,310
	5区	B	42	12	79	1	1	10	56			10	120	21	20	1	1	2	5		1	20	2	9			6			1		繊維	421
		C	6	9	32		16	5	22				86		3	4		1	4		4	3		8		1	6						210
		計	48	21	111	1	17	15	78			10	206	21	23	5	1	3	9		5	23	2	17		1	12			1		1	631
	6区	C	10	10	33		2		17		1	2	47		1						1			3	1	1	1						130
	令区		503	130	1,023	22	259	99	427	2	8	31	3,206	42	108	48	1	6	29	3	91	75	10	543	4	35	66	4	1	4	2	2	
	計																																
		土師器											5,752	須恵器						195	石礫器											837	6,784
総計		767	272	1,873	27	500	162	838	5	14	63	5,558	52	213	100	6	13	65	61		214	106	13	644	18	76	136	7	1	14	5	4	
		土師器											10,131	須恵器						458	石礫器等											1,236	11,827

棒状（或は紡錘形）、浜砂利のほかは加工痕により石器に準じて区分して分類集計した。

器種について：採取した遺物のうち器種の特定し得るものでは複合口縁（弥生後期～古墳前半期）の甕であり、次いで土師器の高坏である。また赤～橙色に彩色した土器片も多く、これは高坏や塊などが主である。小形壺や鼓形器台もあるが、低脚坏や手捏ねのミニチュア土器は極めて少ない。

須恵器では蓋坏が最も多く、甕形土器・高坏・壺の順であるが、皿は極めて少ない。

浜石・礫・砂利など浜辺から搬入した自然礫類は抽出採取したにもかかわらず最も多い。礫器類ではやや大きい台状～皿状石が目立つ。また火熱を受けた角礫（山石）の焼石もある。軽石（浮石）は加工痕は見当らないが漁撈用であったのだろうか。

分布について：発掘面積は区により異なるため直接に土器片数を比較するわけにはいかないが、大まかに次のような傾向が認められる。

総数についてみると、４区が最も多く２区が最も少ない。密度を考慮すると部分的であるためか６区が密である。

包含層下面～遺構面についてみると、４Ａ・４Ｂ・３Ｂ・６Ｃ区で濃密であり、２Ａ～Ｃ区は極めて少ない。この状況は多数を占める土師器片についても同様である。このうち赤く塗られた土器（以下赤彩と呼ぶ）は４Ａ・４Ｂ区が最も多く、次いで３Ａ・５Ｂ区であり、２Ａ～Ｃ区では認められなかった。

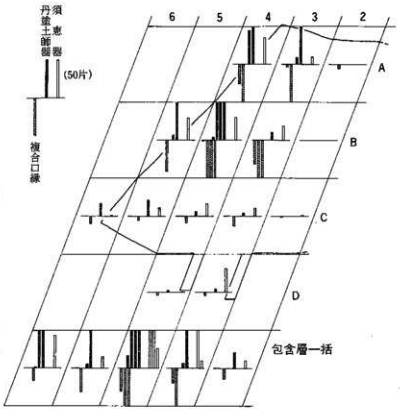


図10　新・古様式土器の分布

この傾向は複合口縁部や土師高坏（新古様式混在）もほぼ同様といえよう。

須恵器の破片は少数ながら各区とも包含層中に主として混在し、特に３Ｄ・５Ｂ区にまとまりが認められ、２Ａ～Ｃ区・３Ａ区は少ない。また堆積した遺物包含層の上～中位出土では、すべての数が最も多い４区に多く、小面積ながら６区でも密である。概して須恵器は包含層の上～中位に多い傾向である。

遺構面～包含層下位出土の数によって新古の区間差を知るため、古相を示すものとして複合口縁土器を、新しい時期のものは須恵器の合計数を用い、併せて赤彩土器片をグラフ上に比較してみた。

これによると、古相の分布と赤彩品の分布はほぼ同様で、谷上方左手にあたる３Ａ・３Ｂ・４Ａ・４Ｂ・５Ｂ・６Ｃの範囲にまとまり、Ｘ２～Ｘ４遺構の所在と符号する。時代の下がるものはわずかながら、谷間を下った３Ｄ・４Ｃあたりにやや密度が高くなる傾向といえよう。

（杉原清一）

Ⅳ 遺　　物

採取した遺物は多数の土器と抽出石器類であり、その数は既に述べた。

土器はすべて細片であり、復元し得るものはひとつもなかった。そこで器種別に特徴のあるもののみを抽出図化した。石器類も同様である。以下これについて記す。

1．器　　台（図11）

器台はすべて鼓形器台である。

1～3は上台・脚台とも端部が欠けているが、筒部の直径5～7㎝、上・脚間隔3.7～4.5㎝（推定）で、1は上台に櫛描擬凹線・脚台はヘラでノ字文を巡らす。3は筒部に浅く細かいノ字文を巡らす。

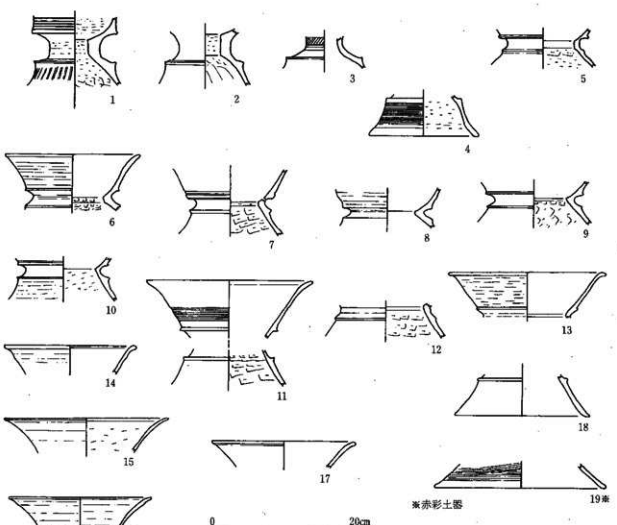


図11 器　　台

表2　実測遺物一覧表

図No.	出土区	備考
11－1	3 上	甕台
2	4B・C	
3	4B 下	
4	5B 下	
5	2A 下	
6	2 上	
7	4B・3B下	
8	5C 下	
9	4C 下	
10	2 上	
11	3B 下	
12	2 上	赤焼
13	3B 下	
14	2A 下	
15	3B 下	
16	4B－X4	
17	?	
18	3B下・2A上	赤焼
19	3B 下	檀塗
12－1	4A－X3	壺
2	3 上	
3	4 上	
4	2 A	赤焼
5	攪乱土中	赤塗
6	4 B	〃
7	4 C	
8	4B－X4	
9	試T 9	赤塗
10	4 A	甕
11	5 C	
12	5 B	檀塗
13	6 C	
14	4 上	
15	3 B	赤焼
16	4 上	
17	3 A	肩施文
18	6 C	
19	4 A	
20	5 B	
21	4A－X3	
22	5 B	
23	3 上	赤塗
24	5 B	
25	4A－X3	
26	4 A	肩施文
27	6 C	
28	3 上	
29	4 A	
30	4 C	
31	3 B	
32	3 A	赤塗
33	4 A	
13－34	3 上	
35	3A－X2	
36	3 B	
13－37	4 A	
38	4 C	
39	6 C	
40	4 A	赤焼
41	4 B	
42	3B－X4	
43	4 上	
44	5 C	赤焼
45	4 上	
46	4 A	
47	4 A	赤焼
48	4 A	
49	3 A	赤焼
50	4B－X4	〃
51	4 A	〃
52	3 B	
53	6 C	
54	4 A	赤焼
55	4A－X3	
56	3 B	
57	6 C	
58	5 B	
59	4 上	
60	3 上	
61	4 B	
62	4 上	
63	3 上	
64	4B－X4	甕
65	4B－X4	
66	4 B	
67	3B－X4	
68	5 B	
69	4 A	
70	5 C	
71	4 A	
14－72	4 C	
73	3B－X4	
74	3 上	赤焼
75	攪乱土中	
76	4 上	肩施文
77	3 A	赤焼 〃
78	4A－X3	〃 〃
79	3B－X4	
80	4 C	
81	4A－X3	
82	4 上	
83	4 B	
84	3 A	
85	4 A	
86	4 上	
87	4 上	
88	3B－X4	肩施文
89	4 B	〃
90	4 B	〃
91	攪乱土中	
14－92	6 C	
93	4A－X3	肩施文
94	3 B	スタンプ文
95	4 上	〃
15－96	3 上	赤焼
97	攪乱上中	
98	3 B	
99	4 B	赤焼
100	4 上	
101	4 上	
102	4 B	
103	3 B	
104	4 B	
105	4 B	赤焼
106	3 A	赤塗
107	3A－X3	〃
108	3 上	〃
109	6 C	赤焼
110	6 C	
111	4 B	
112	3 A	
113	3A－X2	
114	6 C	
115	6 C	赤焼
116	5 B	
117	6 C	
118	5 C	甕
119	4 A	
120	3 上	檀塗
121	2 上	
122	6 C	檀塗
123	6 C	〃
124	試T 8	
125	6 C	
126	3 B	
127	5 C	赤塗
128	3A－X3	
129	4 上	
16－130	5 B	赤塗
131	4 上	
132	4 上	
133	4 B	
134	4 上	
135	6 C	赤塗
136	6 C	
137	4 上	
138	6 C	釜
139	4 A	
140	5 C	
141	4 上	檀塗
142	5 B	
143	4 B	赤焼
144	6 C	無頸壺
145	4A－X3	短口壺
146	3 B	〃 檀塗
17－1	5 B	平底底部
2	3 B	赤焼
3	3 C	〃
4	3B－X4	
5	3 A	赤焼
6	5 B	〃
7	3 B	
8	4 A	赤焼
9	4 上	
10	4 A	
11	4 A	赤焼
12	4 A	〃
13	3 B	〃
14	4 上	〃
15	4B－X4	〃
16	4 A	
17	4 上	
18	4 A	
19	3B－X4	
18－1	5 B	把手
2	4 B	〃
3	4A－X3	〃
4	4 A	注口
5	4 B	把手
6	5 C	〃
7	4 C	土製支脚
19－1	4 A	
2	4 上	
3	3 上	赤焼
4	6 C	
5	4 A	
6	5 B	
7	4 A	
8	2 上	
9	5 B	赤塗
10	5 B	施文破片
11	2 C	
12	5 B	
13	3B－X4	
14	5 B	
15	3 B	
16	2 上	
17	3B－X4	
18	5 B	
19	5 B	赤塗
20	5 B	
21	3 上	
22	4B－X4	
23	5 上	
24	3 B	
25	3 B	
26	4 B	
27	5 B	
28	4 B	
29	5 B	赤塗

図No.	出土区	備考
19－30	3 B	
31	4 A	
32	3 B	赤焼
33	3 B	〃
34	4 A	
35	3 A	赤焼
36	3 B－X 4	赤塗
37	5 C	
38	3 A	
39	6 C	
20－1	5 C	赤塗
2	4 A－X 3	
3	5 B	
4	4 上	
5	4 A－X 3	赤塗
6	3 A	〃
7	6 C	橙塗
8	6 C	〃
9	5 B	赤塗
10	攪乱土中	赤橙焼
11	4 C	赤焼
12	?	〃
13	4 B	橙焼
14	3 B	〃
15	5 B	
16	5 C	赤焼・赤褐塗
17	4 A	橙塗
18	5 B	赤焼
19	3 上	橙塗
20	試 T 8	〃
21	4 B	赤塗
22	5 B	〃
23	6 C	〃
24	5 B	〃
25	3 B	橙塗
26	3 A	赤焼 赤塗
27	4 B	〃 〃
28	試 T 9	橙塗
29	〃	赤塗
30	4 上	〃
31	6 C	橙塗
32	3 B	〃
33	6 C	〃
34	4 C	赤塗
35	3 A	橙塗
36	3 A	〃
37	6 C	橙焼 橙塗
38	3 B	
39	4 上	赤焼
40	4 B	〃
41	4 B	〃
21－42	3 C	

施文破片

図No.	出土区	備考
21－43	5 C	
44	3 B－X 4	赤焼
45	3 B	
46	4 C	
47	3 B	
48	4 上	
49	2 上	赤焼
50	2 A	
51	3 A	
52	3 B－X 4	
53	3 B	赤塗
54	6 C	橙塗
55	4 C	〃
56	4 B	赤焼
57	3 B	橙焼
58	4 上	橙塗
59	4 上	赤塗
60	4 上	赤塗
61	5 C	朱泥塗のち焼
62	4 A	橙塗
63	3 上	赤焼
64	4 A	赤塗
65	6 C	赤焼
66	5 B	
67	3 A	
68	4 B－X 4	橙塗
22－1	3 上	〃
2	2 上	〃
3	3 B－X 4	赤塗
4	4 A	〃
5	4 B	
6	3 B－X 4	
23－1	3 A－X 3	橙焼
2	5 B	赤塗
3	3 A	
4	4 A	橙焼
5	4 A	赤塗
6	5 C	橙焼
7	3 B	〃
8	4 A	橙塗
9	4 B	〃
10	5 C	〃
11	5 C	〃
12	5 C	〃
13	4 A	〃
14	4 A－X 4	
15	5 C	
16	5 C	
17	5 C	
18	4 A	赤塗
19	4 上	橙焼
20	5 B	赤塗

高坏

低脚坏

小形壺

図No.	出土区	備考
23－21	4 上	橙塗
22	5 C	
23	5 B	
24	5 C	
25	6 C	暗赤塗
26	6 C	〃
27	4 A	
28	6 C	赤塗
29	6 C	〃
30	5 C	〃
31	3 A	〃
32	4 上	〃
33	4 A	〃
34	5 C	〃
24－1	6 C	かまど
2	5 B・5 C	〃
3	4＋3 下	〃
4	4 下	?
25－1	6 C－X 1	
2	4 上	
3	5 C 下	
4	5 C 下	
5	3 上	
6	4 C	
7	4 C	
8	3 D	
9	3 B	
10	4 A－X 2	
11	3 B	
12	5 C 下	壺蓋
13	5 C	〃
14	3 上	蓋
15	4 A－X 2	〃
16	5 C	
17	6 C	
18	5 C	
19	2 上	
20	6 C	
21	2 上	
22	6 C	
23	3 上	
24	3 B	
25	3 B	
26	3 C	
27	3 C	
28	4 C	
29	5 C	
30	4 上	
31	6 C	高坏
32	5 C	〃
33	4 上	高台付
34	3 上	〃

小形壺

須恵器

坏身

図No.	出土区	備考
25－35	3 上・6 C	高坏脚
36	3 A	〃
37	6 C	〃
38	6 C	〃
39	4 B	〃
40	5 B	鼈
41	攪乱土中	〃
42	3 上	上
43	3 上	〃
44	試 T 9	輪つまみ
26－45	2 上	長頸壺
46	3 C	〃
47	3 C	小壺底部
48	3 C	平瓶
49	3 C	壺底部
50	4 上	壺胴
51	6 C	〃
52	6 C	小壺
53	4 上	〃
54	4 上	〃
55	?	大甕口縁
56	3 上	〃
57	攪乱上中	〃
58	4 上	〃

須恵器

図No.	出土区	重量kg	備考
27－1	4 A	6.4	石皿
2	4 B	4.0	〃
3	4 上	2.0	〃
4	6 C－X 1	5.5	〃
5	3 B	13.5	〃
6	3 B	5.5	〃
7	3 B	5.1	〃 凹石
8	3 上	1.9	〃
9	4 A	1.0	〃
10	3 上	1.1	石皿
11	4 A	1.48	両面凹石
12	3 上	2.6	〃
13	3 A	0.9	凹石
14	3 D	1.2	両面凹石
15	3 B－X 4	2.8	三面凹・凹
16	攪乱土中	1.3	〃 〃
17	3 B	1.08	叩
18	4 上	1.18	石錘
19	4 B	0.45	〃
20	3 C	0.44	〃
21	3 B－X 4	0.35	〃 4 面叩
22	4 上	2.03	〃 ?
23	4 B	0.22	2 面砥石
24	4 A	0.09	自然礫
25	4 A－X 3	1.0	台石(敲石)
26	4 A－X 3	3.1	〃(〃)

2は無施文である。4は直径14.8cmの脚台部のみであるが、脚端は外反し櫛描条線文をほぼ全幅に施す。このように1～4は弥生終末期の的場式～古墳時代初期鍵尾式の一群としてみることができる。

6～12の筒部はさらに太く短くなったものであり、11・13～19の上台・脚台ではそれぞれ上端・脚端が強く外反する。いずれも施文はなく、ナデ又はハケ目調整であり、脚台上端の突帯は退化して鈍くなる。これらは古墳時代前期大木権現山～小谷様式とみられる。

2．壷・甕形土器等（土師器）（図12・13・14・15・16）

1～8は壷形土器の複合口縁部である。1・2・4の口縁帯は短く直立又は内傾し、数条の擬凹線を巡らすものもある。3・5～8の口縁帯はやや外傾し、高さもやや延び、その下端は繰り下げている。そして櫛描条線を巡らすもの（3・8）、ナデ調整のもの（5～7）、頸部以下にタテハケ目調整のもの（7）もある。そして5・6は赤く塗彩されている。これらは小谷式併行とみられる。

9は大きく外反する単純な口縁で、削り出し様の突帯を巡らせ、肩部にはヨコハケ目があり、赤塗りである。10は短くやや外傾する口縁部分で、口唇を斜めに面を造ったナデ仕上げのものである。これらはともに特異な形状であるが甕形土器であろうか。

11～18は甕形土器の複合口縁部分で、口縁帯は狭く直立気味で擬凹線3～5条を巡らせ、下端は繰り下げる。13・17は肩部に二枚貝によるノ字文を巡らせ、12は赤塗りである。これらの口縁は古態であり九重式に準ずるものといえよう。

19～71は口縁帯が直立又はやや外傾し、下端は繰り下げた突帯で、施文は主として櫛描多条線が巡る一群である。一部擬凹線のものもある。また32は赤塗りである。19～33は口帯部が短く、60～71はより外傾してやや高くなる。口縁内側面は概ね緩い曲線で頸部に至るが、後者には屈曲がやや強くなり段状に屈折するもの（52など）もみられる。いずれも口唇は漸次薄くして丸くおさめる。これらは明瞭には区分できかねるが、的場～鍵尾の一群とみられる。

72～93は口縁帯が均一な厚さで薄く外反し、口縁端は概ねナデで平坦とし、口縁帯下端は繰り上げ又は横に突出する。口縁帯の施文はなく、ヨコナデである。肩部はハケ目の残るものもあるが、概ねナデ仕上げである。但し88のみは櫛描多条線と櫛描波文を施している。これらは概括して鍵尾～小谷期の様式といえよう。

94・95は複合口縁の一部かと思われる細片であるが、口縁は先尖りに外反し、中ば以下に円形スタンプ文を巡らせている。これもほぼ同時期かと思うが類例に乏しい。

96～123は複合口縁の退化した一群である。口縁はく字状に外反し、その中ほどに複合口縁の下端が退化した若干のアクセントがある。96～99はこれより口縁部が一段薄く作られるグループである。100～123は口唇部を平坦になで、101は上面にわずかな凹線を造る。口縁外面はハケ目線のあるものもあるが概ねナデている。肩部の判るものにはハケ目の残るものもある。このうち121はハケ目地に緩やかな櫛描波状線が巡るものである。106～108・120・122・123は赤塗りである。これらは小谷式以降で須恵初期にかかる頃であろう。

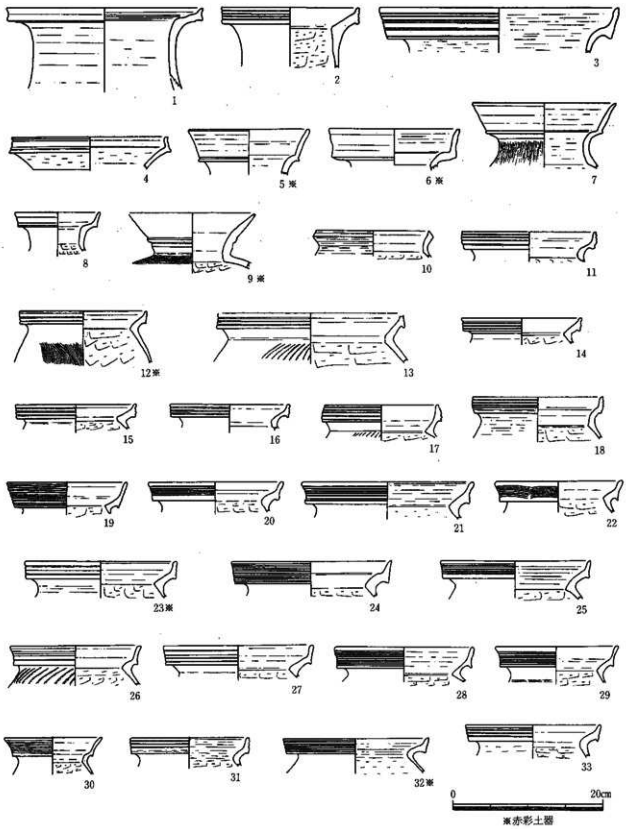

1
2
3
4
5※
6※
7
8
9※
10
11
12※
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23※
24
25
26
27
28
29
30
31
32※
33
0
20cm
※赤彩土器

図12　壷・甕形土器(1)

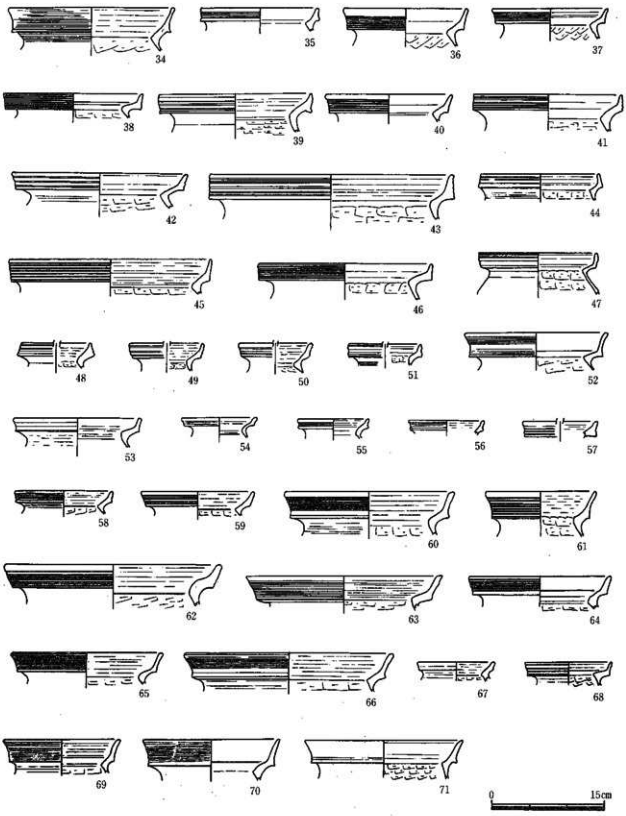

34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
0
15cm

図13 壺形土器(2)

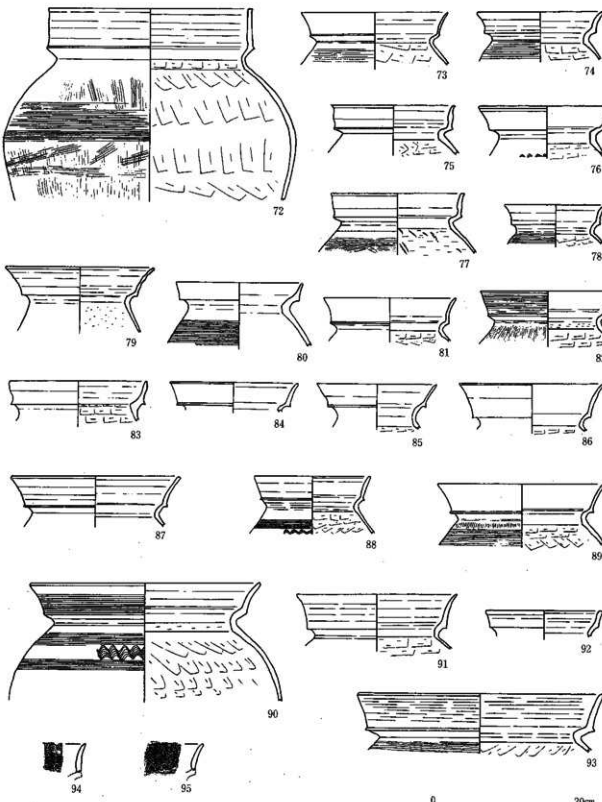

72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
0
20cm

図14 甕形土器(3)

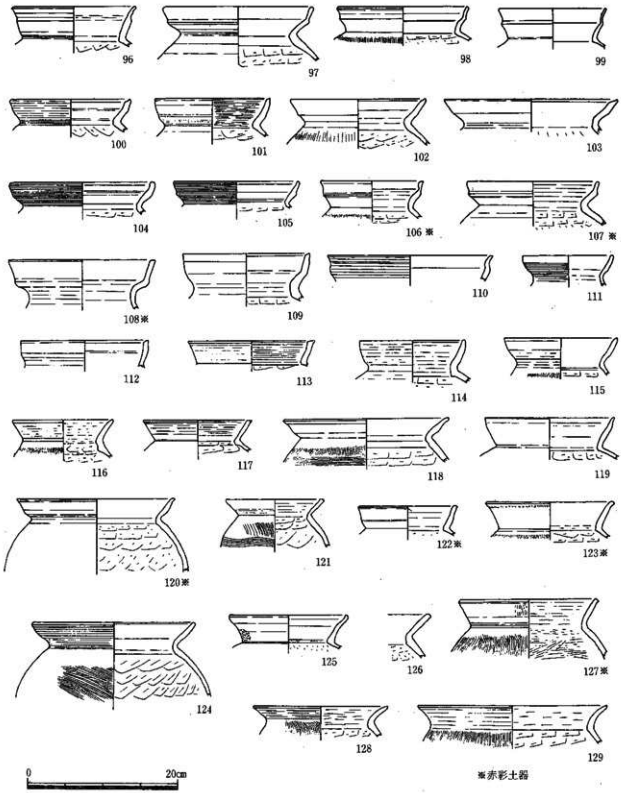

96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106※
107※
108※
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120※
121
122※
123※
124
125
126
127※
128
129
0
20cm
※赤彩土器

図15 甕形土器(4)

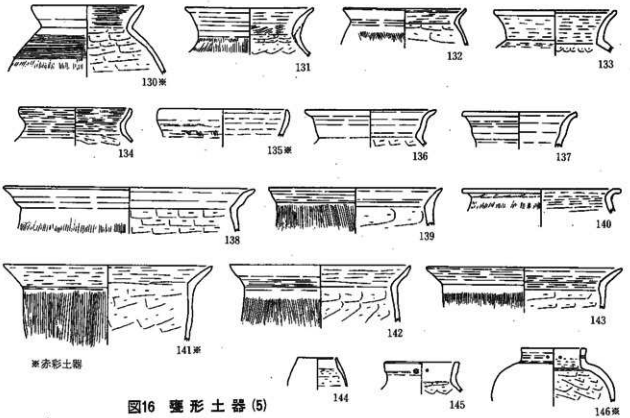


図16 壺形土器(5)

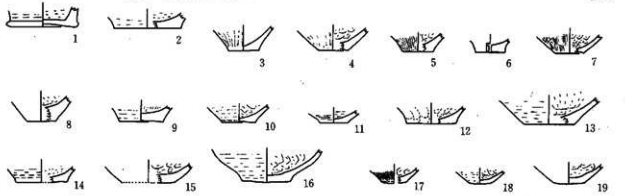


図17 平底底部

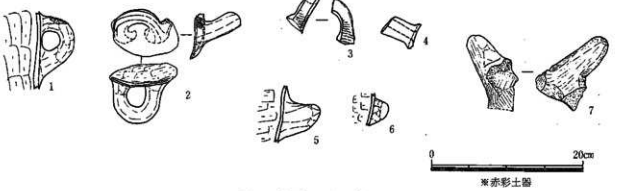


図18 把手・その他

124～137は口縁部が単純にく字状に開くもので、口唇を尖り気味にするもの・丸く内傾又は外傾にするものがある。口縁部に施文はない。肩部以下にタテハケ目の見られるものがあり、127・130・135は赤彩されている。

138～143は口縁部が強く短く外に折れる形であり、頸部はほとんどなく、胴は円筒状に近い胴長のようでハケ目調整され、甕というより釜に近い形かとも思われる。

なお、72～143の各種は、大東高校グランド遺跡及びその一連の又下・角田遺跡に類似するものが多く、小谷式～大東式として捉えられる。

144は小形の無頸壷で、内面削り放し、外面なでている。145・146は厚く短く直立する短頸壷でいずれも口縁に2孔ずつの紐孔を穿っている。これらは大まかに弥生時代後末期の所産とみてよかろう。

3．平底底部（図17）

1は円盤状の底面を貼り付けたもので、大形であり壷かと思われる。2～6は小さいがしっかりした平底又は凹底で、胴部へ反りながら立ち上がる器形で、磨かれたものが多く、6は底部に穿孔があり祭祀用であろう。これら九重式～的場式の甕とみられる。

7～14もほぼ同様の底面であるが、胴部への立ち上がりは反りがなくなり直線的でやや開く。胴下部はナデ調整が多い。鍵尾式あたりの様相である。

15～19は底面がやや丸味となり、胴部へは開いて膨らみながら上がるもので、胴の球形化が窺われる。細かいハケ目もあるが概ねナデ仕上げであり、小谷式併行である。

4．把手等（図18）

1・2は大形の甕形土器の把手で、縦に付く1は上方、横に付く2は下方のそれぞれである。2の接着基部に二枚貝圧痕の施文の一端がみられる。1と2は胎土焼成から同一個体の可能性が高い。年代については判断しかねるが、的場～鍵尾期のものに類似するようだ。

3・4は同一個体の把手部（3）と注口部（4）である。把手は横ではなく壷体肩部に縦位置に付くもので、細かくヘラ刻目文様を施している。この形態の注口土器は的場式にみられる。

5は短角状の把手で、器の両側に付くものであろう。6は横位置に付く弧状の把手で小形品である。器種や土器様式ははっきりしない。

7は双角状に造る土製支脚の一部であり、かまど出現以前のいつとは断じ難い。

5．施文破片（図19）

ここに示したものはすべて甕形土器の肩部にあたるものとみられる。用いられている施文具は、櫛・二枚貝・ヘラの三種であり、文様は多条波状文・平行条線文・刻目文・ノ字文・羽状文でその組合せたものもある。

1～7は貝縁辺の刺突による羽状又は綾杉文、8・9・15・18は貝縁辺の押し引きによるノ字文、

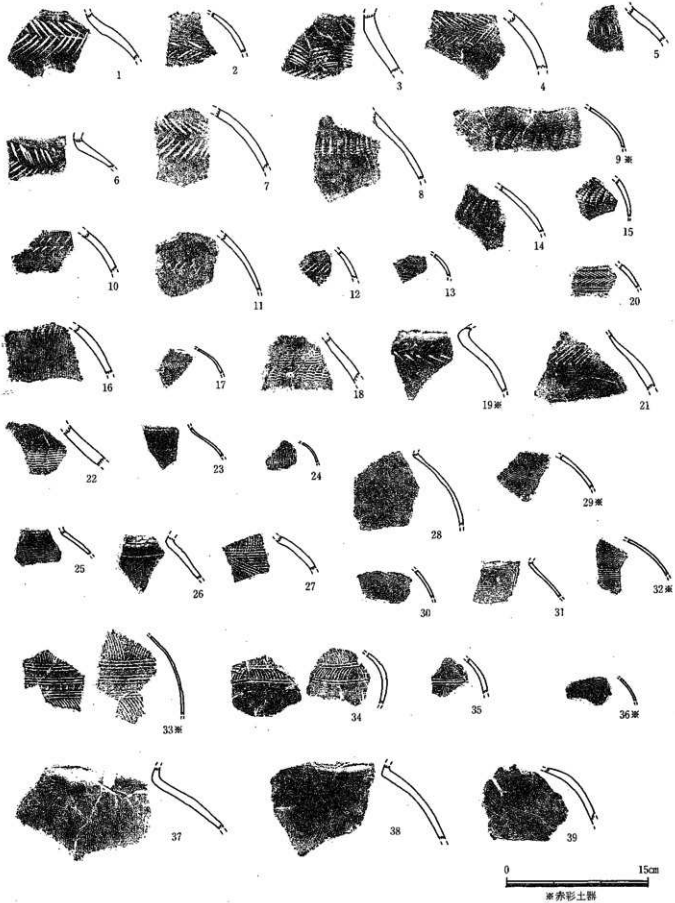

1
2
3
4
5
6
7
8
9※
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19※
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29※
30
31
32※
33※
34
35
36※
37
38
39
0
15cm
※赤彩土器

図19 施 文 破 片

10～12・14・16は同様に刺突したノ字文で、そのうち15は平行条線文との組合せであり、13・17・24は平行条線と細密な刺突連続文である。19はヘラ描綾杉文、20はヘラ描ノ字文であり、22は押し引きノ字文或は簾状文である。23・25～27は櫛条線とその組合せであり、28～32は櫛描波状文である。33は肩～胴上部に貝縁による連続弧状文と平行線文の間に複線のU字形スタンプ文を連ねる特殊で細密な文様構成である。34・35は小形の器の肩部に細密に連続弧状の貝刺突による施文を二段に巡らせ、条線で区画している。36も小形の器であり、櫛先で蹴彫り状に刺突文を巡らせるものである。以上のうち9・19・29・33・36は赤く塗った土器である。

37～39はほぼ同期とみられる甕体の肩部であるが、施文はなく、ハケ目調整の明瞭なものである。

これらの施文は的場式併行期に盛行しており、一部鍵尾式にかかるものもあろう。

6．高　　坏（土師器）（図20・21）

1～3は直立気味の口縁の下に鈍い段があり、複合口縁の退化した姿をとどめている。2は同一個体とみられる坏底～脚頭部もあり、脚接合部は強く指頭で圧着している。脚端は不明。4は坏底部を欠くが、側面との界に段を造るもので、口唇は押圧して上面に浅い凹線を巡らせている。側面はナデ、下底部はハケ目調整である。5～7は脚部片は手ひねり状の造りで、外面はヨコ～ナナメに指頭削り状であり、下底面はヘラで削る。脚端はあまり強くは拡張しない。8は手ひねり筒状で脚端は強く屈折して開く。9は複合口縁様の脚端部で櫛描条線を巡らせている。以上のうち坏部では1、脚部5～9が赤～赤褐色に塗彩したものである。これらは形態から概ね的場式に準ずるものと思われる。

10は内反り、11～22は外反りの坏部で、坏底部と側面（体部）とが明瞭な段によって区画されるものの一群である。口縁は漸次薄く尖り、内面は磨き（10～16・18）または入念なナデ（17・19～22）であり、外面はナデ（19～21はハケ目が残る）、下底面は脚頭へかけてハケ目を強く放射文様状にしているもの（10・16・17）と、ナデているもの（13～15・18・19・22）の2様がある。17・19～22は赤塗りである。

23～27は同様に薄く外反する坏部であるが、底部と側面との界の段が不鮮明になる一群である。そして23～25は赤塗りの上に鮮やかな彩文を施している。23は内面に濃い赤褐色で放射状曲線の彩文を描き、24・25は内外面とも同様に斜格子状の彩文を描いている。26・27はやや浅くより開いた坏部で26は内面を磨き27はナデで、ともに赤塗りである。

28～30は口縁の内湾する坏部に彩文を施すものである。底部は小さく、側面との界に不明瞭な段が残り、側面はナデである。28は橙色に29・30は赤色に全面を塗り、彩文はいずれも内面のみで赤の放射状曲線文である。

31～36は側面と底面の区別がほとんどなくなるもので、坏形も碗形に近付き、内外面ともナデが主であるが、31は内面にハケ目を文様状とし、36は脚頭接続部にハケ目を文様状に付けている。

これらの年代観については、側面に段を付けて屈曲する坏形の一群（10～22）は概ね鍵尾式～小谷式に準じ、屈曲が退化鈍化して碗形に近付き彩文を施す一群（23～36）は、須恵器のⅠ～Ⅲ期頃に併行

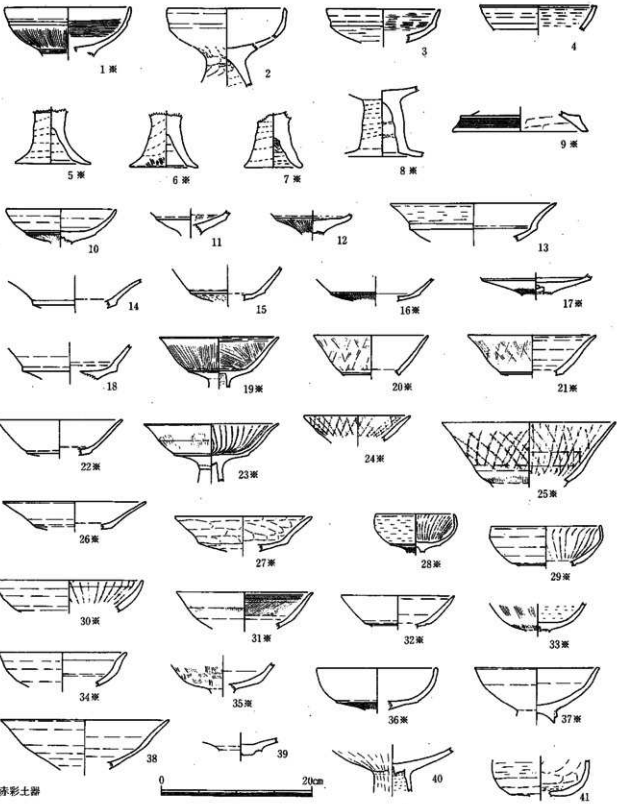

1※
2
3
4
5※
6※
7※
8※
9※
10
11
12
13
14
15
16※
17※
18
19※
20※
21※
22※
23※
24※
25※
26※
27※
28※
29※
30※
31※
32※
33※
34※
35※
36※
37※
38
39
40
41
※赤彩土器
0
20cm

図20 高　　坏 (1)

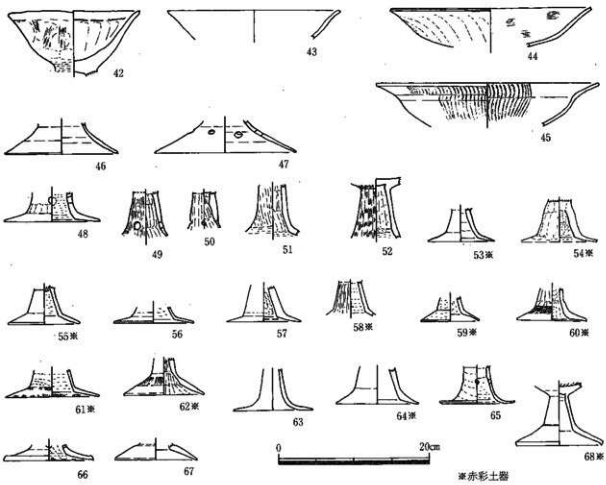


図21 高　　坏 (2)

するものであろう。

37は瓶形でやや厚く、内外ともナデ、全面を橙色に塗っている。上記より新しいものであろう。38は側壁中はやや厚くして若干屈曲する坏で、内外とも磨き、内面には炭化物が付着している。39・40は坏底部で、脚接合部はへそ状にせり出し中央に小さな窪みがある。前者はナデ、後者は磨きである。38～40はいずれも歴史時代に入るものかと思われる。

41・42は手捏ねの大形品であるが年代観ははっきりしない。

43・44はほとんど砂を含まないち密な土を用いた薄く均質な坏部で皿のように開く。43は内面を磨き外面はナデている。44は内面を暗灰色に焼成したものである。45も同様な坏部であるが、上半部分を強く開張させるもので、外面はタテに磨き、内面は口縁部分と坏内部とを別方向に磨いて暗文としている。このように43～45はさらに下って、平安期に近いものとみられる。

46・47は砂粒を含む胎土の薄造りで大きく延び開く脚部で、47は6孔の円形透し孔がある。48は脚が筒状をなし、その下端で強く屈折してL字状に開くもので、透し孔は4孔である。49～52は脚端を欠く筒状部分で、透し孔は49が3孔、50が4孔あり、他はない。52は磨きであるが他はタテに強くナ

デ下ろしである。

53～62・64はいずれも脚端が折れて開くもので、透し孔はなく、54・58・60はタテ削り状に器面調整して他はヨコナデであり、61・62は脚端部にハケ目が残る。また53は赤褐色に、54・55・58・62は橙色に、59・60は明赤色に塗彩されている。61だけは塗彩ののち焼成したものかとも思われ明橙色を呈している。

63～65は脚下端が折れ曲がらず曲線をなして強く開くもので、特に65は末端が接地面より上方に反り上る形をなし、透し孔4孔がある。いずれも胎土には細砂粒を含む。66～68は脚下端が折れる形であるが、脚末端が接地面へ尖るもので、須恵器のそれに擬したものとみられる。66には透し孔が認められるが数は不明である。また68は橙色に塗彩されている。

以上の高坏脚部の年代観は明確にし難いが、形姿や透し孔、胎土からして、46～52・54・60・65などは古態と思われ、小谷式併行あたりに、56・59・66～68などは新しく奈良時代まで下がるものではなかろうか。

7．低　脚　坏（図22）

低脚坏の脚部とみられるものは1～6ですべてである。6を除いていずれも脚端は外反し、1・2は橙色に、3・4は赤色に、特に3は底裏まで赤色に塗られたものである。5は大形品である。6は脚坏の部分とみるが疑問が残り不明である。

1～5は鏡尾式～小谷式の間にあたる限られた期間のものだろう。

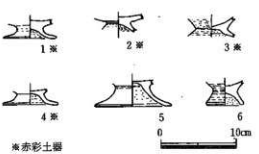


図22　低　脚　坏

8．小形壺・埦（図23）

1～24は小形の壺乃至は小形丸底坩とみられるものを一括した。

1～6は口縁が直立に近い一群であり、2は複合口縁の退化したものである。4・5も口縁中ばで厚さを変えて弱くアクセントを付けており、これも2に続く時期かと思う。6は小形丸底坩とよぶべきでハケ目痕が残る。2は赤く塗った土器である。

7～16も小形丸底坩で、口縁は単純に開く形である。また12・13・15・16などの胴部はタマネギ形に近い胴張りであり、14は肩に段状のアクセントが付く。11は複合口縁であることも考えられる。器壁は概ねナデているが、10・12・16は磨きがかけられている。

17～23は上記よりやや大きい器で単純口縁であり、口唇を平坦にするもの（17・19）もあるが、他は丸味～やや尖り気味としている。壁面調整では17・19・22・23の肩部にハケ目が残るが、他はナデている。18・20は赤色に21は橙色に塗ったものである。

24は口縁が強く短く屈曲する甕形の器で器壁はナデている。この器形は上記一連とは趣を異にする

もので、かなり後出するものとみられる。

これらのうちに小形丸底坩の口縁が高く延び、体部が縮小する形のものがないこと、退化した複合口縁とみなされることなどから、年代観は24を除いて、大木式～小谷式併行期が主であるとみられる。なお、24はさらに大きく下がるものであろう。

25～34は塊形土器であり、その多くは赤く塗彩されている。25・26・27は半球形をなし、25は粗いハケ目が残り内面を赤褐色に塗る。26は指頭圧で粗くヨコに面削りして、内面は厚く赤褐色の顔料が塗られている。27も26に近いものであるが、外面わずかにハケ目が残る。28～34は底部がやや緩く、側～口縁は急湾して立ち上がり、口縁端は内湾気味になる。このうち28・30～32は口縁直下に鈍い段を造り、口縁端を平坦にするものと尖り気味にするものとがある。28～34はすべて赤色に塗られている。

これら塊形土器の様式は詳かではないが、年代観は概ね上記した小形壺類に同じと思われる。

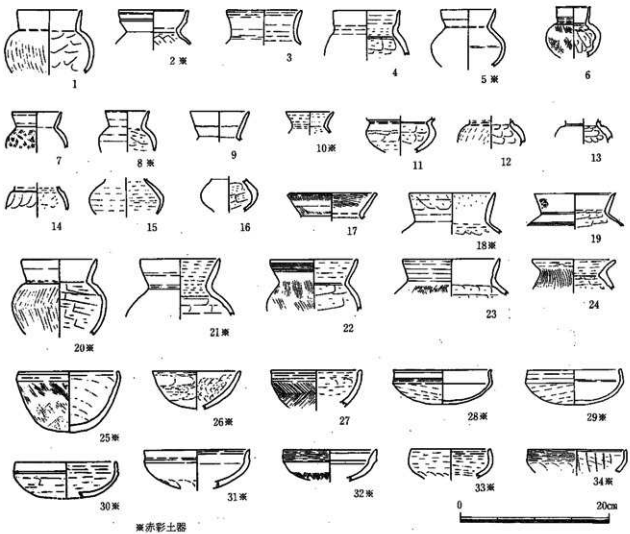


図23　小形壺・塊

9．かまど等（図24）

1～3はかまどの破片である。1は部位不明であるが下端の接地部分と、焚口の底部及び上端部片で、同一個体とみられるものである。下端は荒くヨコ削り、内面はすべてタテに荒く削り上端は削り揃えている。

2・3は1より大きいかまどで焚口下端及び上端部片である。上下端はヨコに削り揃えて、下端は厚くやや開き、上端は薄い。外面はハケ調整である。

4は器種は判らないが大口径の円筒状のもので、その上端部片とみられる。内面はヨコに削り、外面はハケ目かと思われるヨコ調整である。

かまどの年代は不明であるが、あまり時代の下がるものではないと思われる。

図24　かまど等

10．須恵器（図25・26）

1）蓋坏等

先ず蓋について記す。

1～3は天井部は比較的平らで大部分を削り、稜径と口径がほぼ同じで、体部高は2㎝に近く高い。口縁はノミ刃状である。山陰Ⅱ期に相当する。

4～10は天井部の削りが粗で稜は凹線に変わり漸次消失する。体部は開いて天井との界が不明瞭となる。口縁端は内面に段が残る。Ⅲ期に相当。

11・12は口径が小さくなり、天井部と体部の界線も消失している。口縁内面の段も消失する。Ⅳ期古段階に相当。13も同様であるが壺類の蓋であるかもしれない。

14はかぶせ蓋様式で、15も同様式のつまみ部である。いずれも奈良時代に入るもの。

16～32は坏身である。16～20は立上がり直立気味で、口縁はノミ刃状であり、底部は大部分が削りである。18はⅢ期に他はⅡ期に相当する。21～25は立上りが内傾し、口縁は先尖りになり、ナデ面が広くなる。これらはⅢ期に相当する。

26～30は立上りがさらに内傾して短くなり、器径も小さくなる。底面削りも小さい。これらはⅣ期古

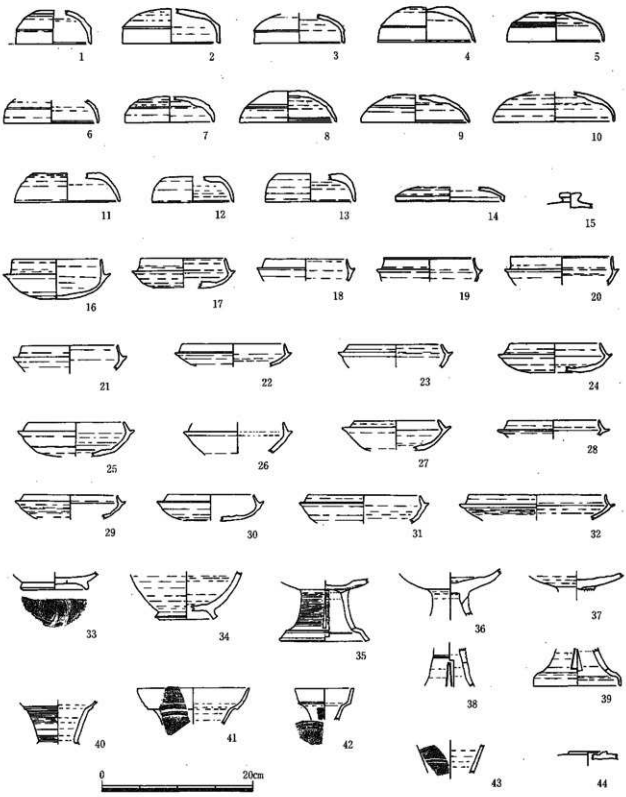

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
20cm

図25 須 恵 器 (1)

段階に相当する。

31・32は高坏の坏部かと思われ、32が31より古態でありⅢ期とみられる。

33は高台付の坏とみられ、底面は糸切りである。34は高台付の壷底部で、底面は同様に糸切りである。奈良期に相当しよう。

35～39は高坏で、いずれも2方の透しをヘラ切りで造り、38・39は狭い三角形、他は線状の切り込みとしている。脚端の判るものは35・39であり、これは下端が開かずかえり状に立つものであり、大まかにⅢ期頃のものと思われる。

40～43は甕の頸～口縁部で、41～43の頸部にはち密な櫛描波文を描いている。このうち41が最も古く、42が最も新しい段階とみられることから、Ⅲ～Ⅳ期古段階と思われる。

44は蓋の削り出し輪つまみ部分で、器種は不明であるが手法から奈良期以降と思われる。

2）壷・甕等

45～47は長頸壷で、内面はロクロ引きのままである。48は平瓶である。49は壷かと思われる糸切りの平底である。50～51は小形壷で51は短頸であろうか。いずれもロクロ引きのままである。53・54もほぼ同様であるが、52は小形壷ながら開いて立ち上がる頸部と胴上部にち密な櫛描波状文を巡らせている。これらのうち51～53は肩張りや施文から他より古く、48・49は奈良期以降に下がるものである。

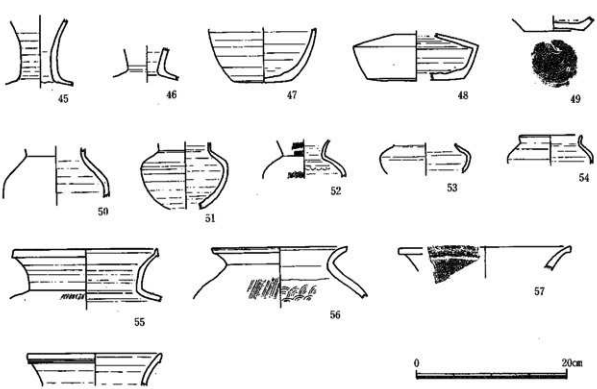


図26 須恵器(2)

その他は明瞭ではない。

55～58は甕の口縁部で、55は口縁端が上方に折れて尖る。56は強く短く曲り、端部はタテに平面を造る。57・58はその端部がやや肥厚して口縁帯を造り、58はその下端をわずかな稜状とする。55はⅢ期に、以下はⅣ期の新段階とみられる。このほか大甕の胴片があったが、内面は円形叩文、外面は平行叩目文であった。

11. 石　礫　器（図27）

自然礫石や人口の痕跡のあるものや焼け石など合計1200点余りを抽出採取したが、このうち主として加工痕のあるものの一部を図示する。石材はすべて直近の浜のものと同じで、安山岩質のものが多いが岩石鑑定はおこなっていない。

1～8は偏平な石材を用いた石皿で、平らな面の中央は敲打によって凹み、その縁辺平面は磨面となっている。3の表面には炭化物の付着が認められ、破損品（3～5・7）もあるが、縁に打痕のあるもの（5・7）もある。

9・10は小形で平面は摩擦痕のみである。11～15も同様の円～やや長円形偏平なもので、中央が敲打で窪む凹石である。この窪みが表裏2面のもの（11・12・14）、縁辺に打ち欠きや打痕があり裏面は磨面のもの（15）もある。

16～21は棒状の敲打石であるが、それぞれ趣を異にする。16はやや角柱状の石で、上下両端が強く叩き潰れており、長縁両側にはそれぞれ上下2か所が叩き潰して縄がかり状に凹み、上面の磨面中央に2か所敲打による窪みを造るもので、叩石とも凹石とも又石錘ともなる品である。17は偏平やや長円形の石の上下両端が敲打によって大きく潰れており打石である。18は紡錘形の石の上面2か所は敲打による窪みで、長縁両側には16と同様2か所ずつ打ち欠き縄がかりを造る。19～21は平らな面を磨面とし、その中央が敲打で窪み（19・20）、上下の長辺両側に各1か所ずつの打ち欠きを造る。これらは石錘であり、また凹石でもある。

22は細長い厚板状の石材で表裏とも敲打で窪み、また上端と左右側面は打ち欠きでかかり状としているもので、やはり石錘でもあろう。

23はち密でより硬質な頁岩～チャート質の板状石片で、上面と側面の面が砥石として使われている。24は小さな棒状の自然石で人工の痕跡はない。他にも同類が多数あったが使途は不明である。祭祀用の1つであろうか。25・26も同様に加工痕は全くない自然石であり、平面を利用して何らかの置き台として用いたものであろうか。

このほか軽石も10点余採取したが図示しなかった。

以上の石礫器類には顔料等の付着は認められなかった。また年代も特定し難い。

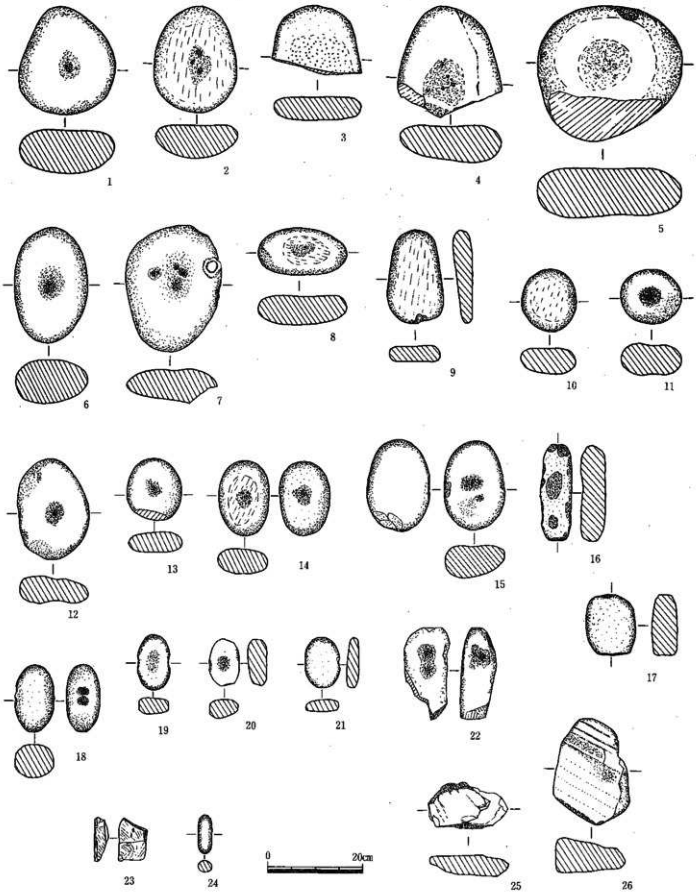


図27 石 礫 器

このほか浜砂利も多く採取した。次表はＸ２、及びＸ４に関わるもので、粒別の大きさと重量を示す。

重さ	～2	～5	～10	～30	～60	～100	～200	～400(g)	合計(個)
Ｘ２			13	13	6	5	3	1	40
Ｘ４	39	21	22	7	2				90

長さ	～1	～2	～3	～5	～8	～12(cm)	合計(個)
Ｘ２			19	14	6	1	40
Ｘ４	39	32	11	5			90

このように採取の精度もあろうが、か所それぞれに細かい浜砂利を搬入している。

（杉原清一）

Ⅴ　ま と め

１．若干の指摘事項

採取した遺物（土器）はすべて細片であり、器種・年代観も特定できないものがほとんどであった。これらから抽出図化し得たのは約400点で、これをもって遺物の代表とするには不安も残る。しかしあえて抽出した遺物によって指摘を試みる。

ａ．大まかにでも年代観の特定できる複合口縁の土器や鼓形器台、須恵器について、調査区内での分布状況と検出遺構との重なりをみると、前記（図10）のように遺構面～包含層下位検出の弥生後～古墳前期遺物はＸ１～Ｘ４遺構及びその付近にまとまり、古墳後期以降の須恵器は調査区南隅に偏る傾向である。また、須恵器の数量は下層位より包含層の上～中位で、南端寄りに多く、遺構も検出されなかったことから、時代の下るものの拠点は調査区域外にあたるのかと思われた。

ｂ．上記を踏まえて赤彩土器についてみると、やはり古式土師器と同様の分布を示し、年代幅の予想される土師器高坏はやや分散して谷下方へも分布する。このように谷下方に分布するものとしては単純口縁の甕形土器や、土師器の塊が挙げられる。しかし、それぞれに対応する遺構は検出されなかった。

このような分布状況は、谷に入って左手（北西）山裾の岩盤質に小祭壇と、谷中央の小さな広場の中心に巨石を集めたＸ４が造られ、砂礫土の流下堆積が進むと共に小祭壇の位置が都度移動後退したが、谷中心のＸ４遺構は引き続き連続して営まれた。さらに下って須恵器の時代には、谷入口から右に進んだ位置へと主点が移ったものとみることができる。

c．各遺構に伴うか又は同時性混入とみられる土器の挿図No.を挙げると次のようである。

	器台	甕（複）	甕(単)	平底	低脚坏	小壺	文様破片	高　坏	スエ	年代観
X1		35				※		※	1	6C前及び8Cまで
X2			113						10	6C後
X3		1・21・25・55 78・81・93	107・128 145	12		1		2・5		4C末～5C
X4	16	8・42・50・64・65 67・73・79・88			3・6	15	13・17・22・36	44・52・68		4C後～8C

※　図示していない

このようにX1地点は少なくとも新古2回の使用が想像され、X4は弥生末から奈良時代まで連続して用いられたと思われる。

このほかX3から山際沿いにX1までの岩盤質地山面付近には、浜石や中～古段階の土器片の散布密度が高いことから、かつては同様の遺構が複数造られていたものと想像される。

d．図示した土器約400点を器種別に推定年代ごとに配列してみると図28のようになる。

このようにひろげ遺跡は祭祀の跡であり、その変遷を辿ると始まりは弥生時代後期後半で、続く4～5世紀に遺物が最も多く最盛期であり、土師器の甕や小形壺や碗、鼓形器台や高坏などが用いられている。

古墳時代後期（6世紀）になると土器は須恵器に変わり、主として蓋坏が次いで高坏が用いられるが、調査範囲では数的に規模が縮小する。さらに奈良時代に至る数量的には再び大きくなり、主として土師器の高坏のほか、かまどや釜なども見られ、若干の須恵器（坏壺など）も認められる。そして9世紀に入る頃終わりとなる

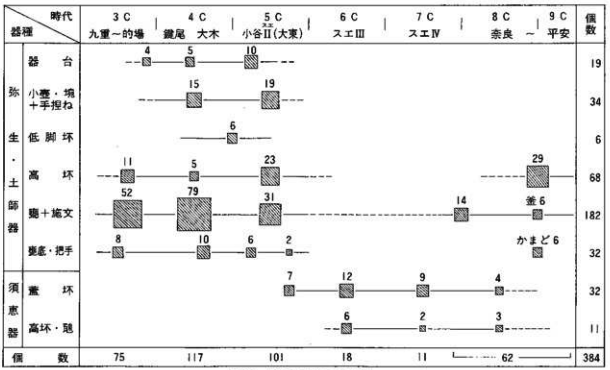


図28　器種別の推移

石器類や浜石も多数用いられているが年代は特定し難い。石器は石皿や敲打石類が多いが、これらはこの地点での祭祀用ではなく、本来日常生活に用いていた品の転用で搬入したものとみられる。浜石や浜砂利は遺構としたところ（Ｘ１～Ｘ３）に多く用いてあり、山石と共に小テラス状の祭壇を造るのに用いたとみられる。

e．焚火跡も３か所検出したが、理化学年代は明確な値が得られなかった。この焚火跡は祭壇状遺構とは別の場所で格別の構造も認められなかった。但し焼石は点々と転がっていることからすると、山石を配置して火を焚く行事を伴っていたと思われる。或は甕などを置いて行ったのかもしれない。

２．結　び

ひろげ遺跡は浜に面した狭く小さな谷にあり、堆積した地表面はかなりの傾斜地であった。後背の稜上には岩脈が列をなして露頭し、永い年月に崩落した岩石類や風化土の堆積で成り立つ地盤であった。

この急峻な山腹の裾部に小祭壇様遺構が繰返し営まれたもので、その多くは自然崩壊してしまっていたが、下層からＸ１～Ｘ３の遺構を、又直近の谷中央部の窪み地形には巨石を集めたＸ４遺構があり、４世紀から８世紀に至る夥しい土器片や礫器、そして整った形状の浜石などを検出した。このほか単独の焚火跡も複数あった。

これらの知見から、弥生時代後期後半から奈良時代まで続いた祭祀の跡と判断した。しかし、古墳時代以降の祭祀遺跡に通例とされる手捏ね土器、ミニチュア品などはほとんど見られず、ただ赤く塗った土器が多く、２例ながら桃の核も採取した。

Ｘ１～Ｘ３遺構は岩盤質地山をわずかに小壇状に削り出し、山礫の間に浜石を雑然と並べたもので石の間や付近には土器細片が散布していた。土器片から弥生末～古墳前期のＸ３、古墳中～後期のＸ２或は古墳中～後期と奈良期の重複するものＸ１があり、大岩を中心に大きい石礫を集めたＸ４遺構は“磐座”的なものと推定される。

使用された土器は時代によって器種に変化が推定された。弥生時代後期から古墳時代初期の頃は実用の甕、器台と小数の高坏の組合せ、古墳前期から中期の頃はこれに小形壷や赤塗り椀、若干の低脚坏が加わって最盛期であるが、須恵器の出現によって大きく変化し、古墳末期から奈良時代には須恵器の蓋坏や高坏、橙色に塗られた土師高坏、そしてかまどなどに変容している。

石礫器や浜石については年代を特定できなかったが、石皿や敲打石類は実用品の転用とみられることから古墳時代前半までとみられ、これらも祭壇の構成材として用いられている。また浜から掬い上げた細砂利も同様であろう。そしてこれらの器や台石上には何を供物としたかは判らないが、野生の桃核もあるからこれもその一つとみることができよう。また祭事には火を用い、焼石があることからすると、石を組んで土器を置き煮焚きを行う行事も伴っていたと思われる。これは下るとかまどを用いるようになったのだろう。これらのほかに大形の石錘や不定形の軽石などもあることからすると、この祭祀は漁撈によって生活する人々によるものと推察される。

この遺跡の性格を考えるのにはその環境も重要な要素となろう。遺跡後背の独立山陵は海岸線から見るかぎり端正な姿の独立山とは見えない地形であるが、浜沖約100mも離れて海上から遠望すると、諏写真のように西に延びる島根半島の中ばに独立した錘形をなす山陵の正面にあたり、また手前方向海浜へ向かって延びる切り立った稜線上は岩脈の露頭が列をなすなど、かつて“カンナビ”であったことは想像に難くないものである。

このような遺物・環境などの先例は当地方では希であるが、隠岐・兵庫遺跡の場合と共通する部分がある。即ち、ひろげ遺跡はこのような環境を背景に、弥生時代後期から奈良時代まで続いた海に生きた人々による磐座的な祭祀の斎場であり、発掘調査はその一部分であったことになる。

このほかに付近の地名等についても検討を要するが明瞭でない。例えば鬼ノ目（おんのめ）など特異な地名があり、かつて土器などが出土したとも言われている。そして“ひろげ”“ひろげ浜”の地名は「雲陽誌」に見られるが、由来等は記載されていない。

なお“ひろげ”地名の由来として語り伝えのあることが判ったのでここに収録しておく。遺跡に近い大字日御碕中山地区の石田善蔵氏の談によると、氏の祖父（江戸末～明治初期初年生まれ）から聞いた話として「この浜は日御碕神社の経島の祠にある“書きもの”や“経・文書”などを持って来て、この浜で読んだことにより“ひろげの浜”と呼ぶ」

これによるとひろげでの祭祀は奈良期に終わるのではなく、以降少なくとも中世又は江戸時代までも形を変えて続いていたことになるが、これ以上の確認はできなかった。

（杉原清一）

参考文献

1．『大社町誌』上・下巻　－大社町－　平成３・７年

2．『雲陽誌』（複刻本）　雄山閣　昭和46年

3．勝部・西尾：「西ノ島・兵庫遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告Ⅸ』　昭和57年

4．柚原・松本・楫山：「島根県隠岐・兵庫遺跡調査概報」『祭祀考古創刊号』　1994年

5．東森市良：『安来平野の古墳文化』－　（私家版）　1995年

6．山本　清：『出雲の古代文化』　六興出版　1989年

7．「原始信仰」『新版考古学講座８巻特論上』　－雄山閣－　昭和46年

8．大場磐雄編『原始神道期Ⅰ』－神道考古学講座第２巻－　雄山閣　昭和47年

9．『角田遺跡・又下遺跡・（付）大東高校グランド遺跡』－大東町教育委員会－　1988年

付編

ひろげ遺跡の焼土の熱残留磁気測定

島根大学総合理工学部物理科学科　時枝克安

(1) 目　　的

ひろげ遺跡で出土した焼土の焼成年代を求めるために、焼土から定方位試料を採取し、それらの残留磁気を測定した。

(2) 試　　料

焼土は幅～60cmの狭いトレンチの底部にあり範囲が小さく、焼成度が低い。焼土の全面からできるだけ多くの試料を採取するように心がけたが、試料数は18個にとどまった。焼土の性格は不明である。

(3) 測定結果

焼土の残留磁気の測定結果は図1に示す。図から明らかなように、データは大きく分散しており、それらの一部が集中することもないので、これらのデータから地磁気年代を推定することは不可能である。

(4) 交流消磁

ひろげ遺跡の低焼成度の焼土の測定データの分散の原因としては攪乱、および焼土の焼成時以降に獲得された2次的磁化が考えられる。もし、後者が分散の原因であれば、交流消磁によって、残留磁気の方向のまとまりを改善できる場合がある。交流消磁というのは、交流磁場の中で試料を回転させながら、磁場強度をある値Hから零になるまで滑らかに減少させて、杭磁力がH より小さい磁化成分を消去する方法である。

5個の試料に対して10mTの交流消磁を行った。通常、方向分散の原因が2次的磁化の場合、残留磁気強度が約半分になれば方向が集中する傾向が認められるはずである。しかし、いずれの試料についても、消磁後、残留磁気の強度が～1／2に減少したにもかかわらず、図2に示すように、方向が揃う傾向は全く見られなかった。したがって、ひろげ遺跡の残留磁気の方向の分散の原因は攪乱と断定できる。攪乱を受けたデータから焼成時の地磁気の報告を再現する方法はない。

(5) 結　　論

したがって、ひろげ遺跡の焼土は攪乱を受けているために、地磁気年代の推定ができないことになる。

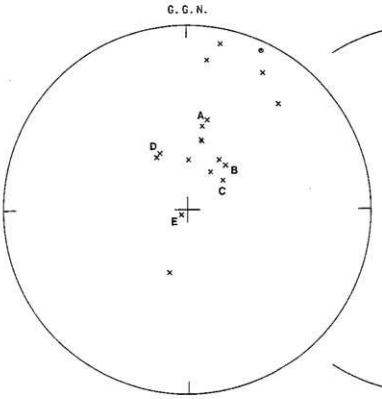


図1　交流消磁前

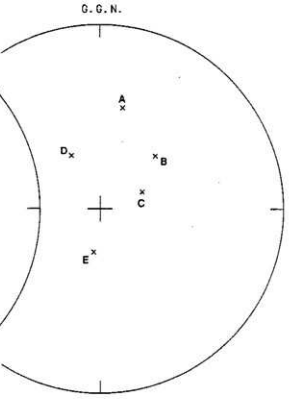
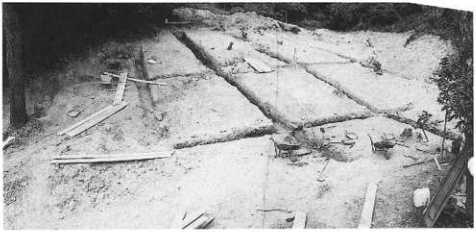


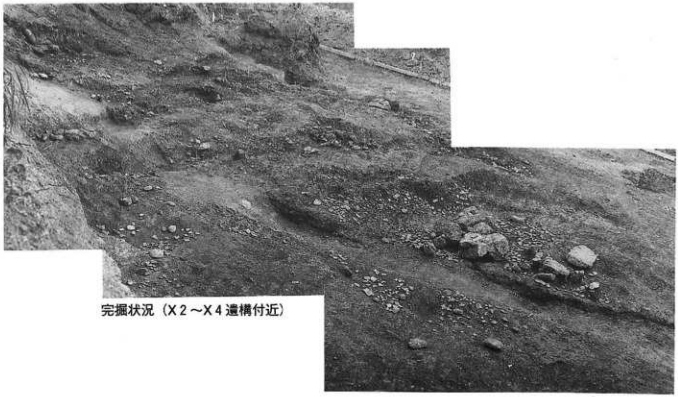
図2　交流消磁（10mT）後

PL 1

発掘前状況



トレンチ調査



完掘状況（X２～X４遺構付近）

発掘作業（X２遺構～３A区）

発掘作業（X４遺構付近）

遺物包含状況（X３付近トレンチにて）

PL 3

X2遺構

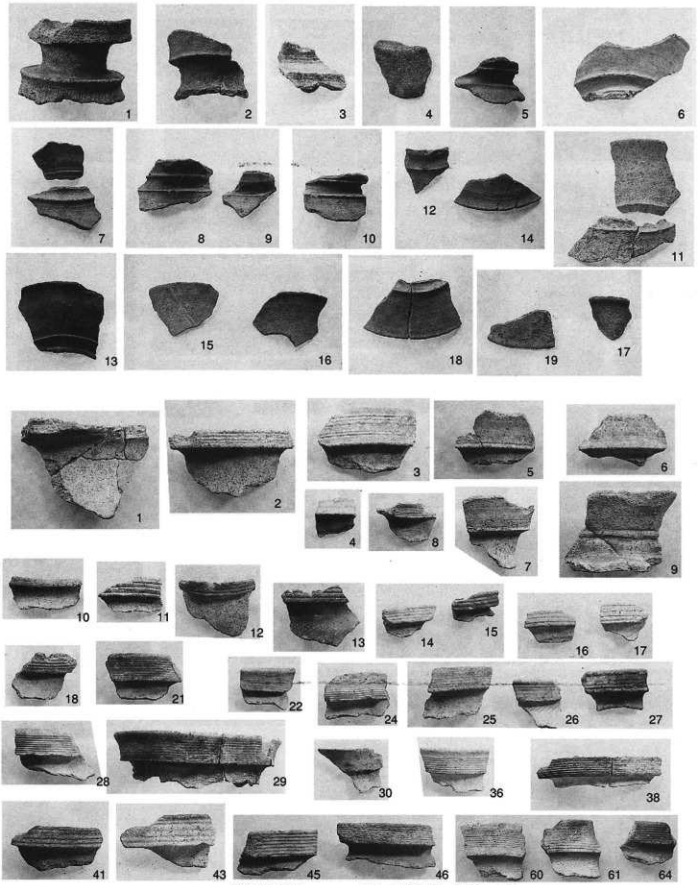
X1遺構

X4遺構中心部

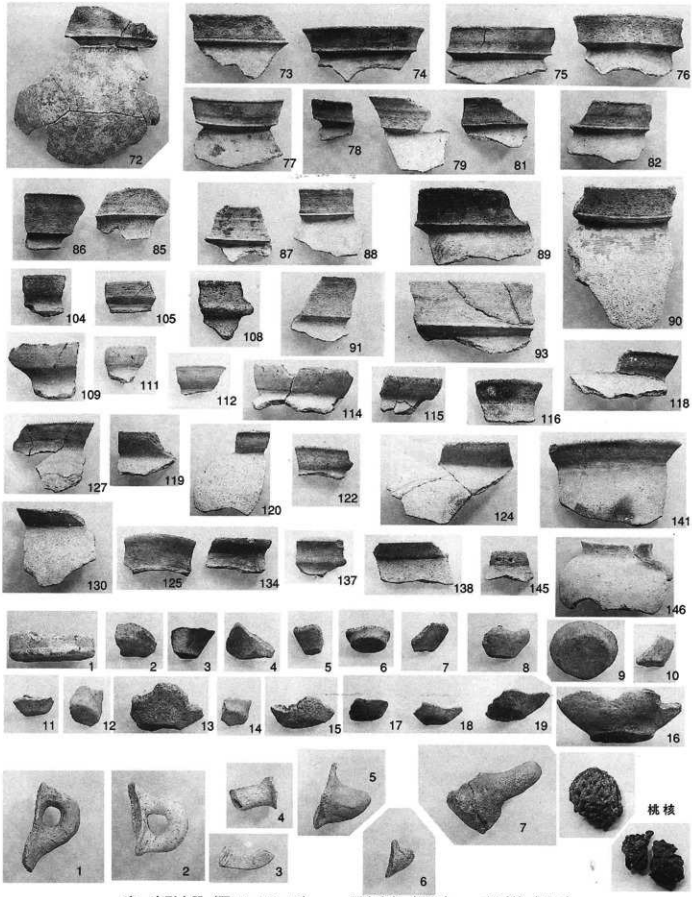
現地指導

遺物の推積（溝状）

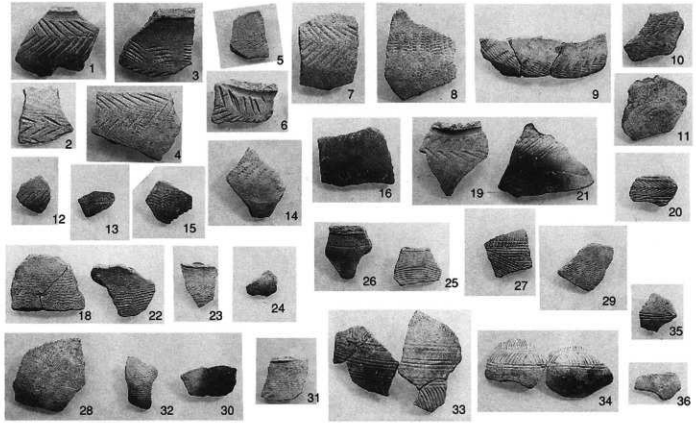
遺物の整理

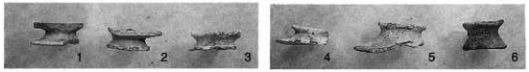


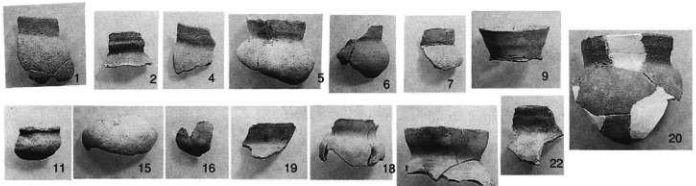
器台（図11）　　壷・甕形土器（図12・13）

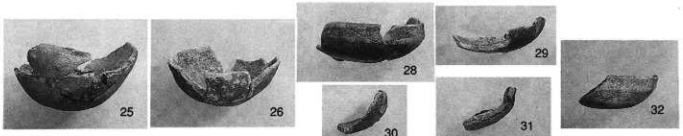


壺・甕形土器（図14・15・16）　平底底部（図17）　把手等（図18）



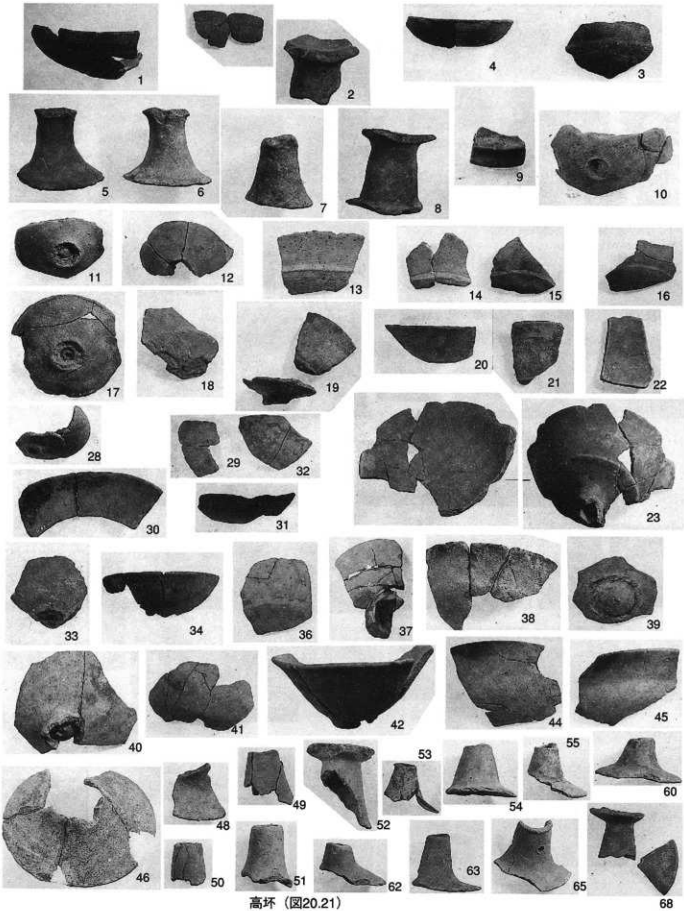




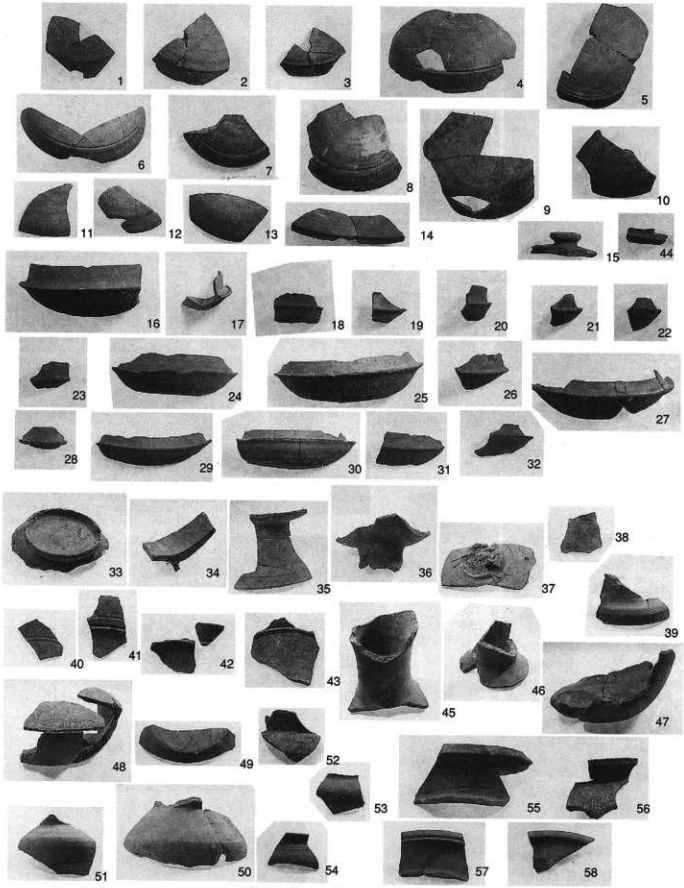


施文破片（図19）　低脚坏（図22）　小形壷・埦（図23）

PL 7

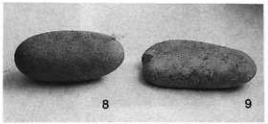

1
2
4
3
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
28
29
32
23
30
31
33
34
36
37
38
39
40
41
42
44
45
53
55
60
48
49
52
54
46
50
51
62
63
65
68

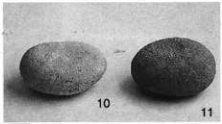
高坏（図20.21）

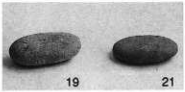

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
44
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
45
46
47
48
49
52
53
55
56
51
50
54
57
58

須恵器（図25.26）

PL 9







軽石

3区　焼石等

X3 遺構

5B 区

X3 遺構（斜面）

石臿器（図27）　　X4 遺構（下段）

主要地方道大社日御碕線
中山工区特別原単(改良)工事
に係わる発掘調査報告書

ひ ろ げ 遺 跡

1997年3月

発行　大社町教育委員会
島根県簸川郡大社町大字杵築南1395

印刷　㈲大社プリント
島根県簸川郡大社町大字杵築西1936-3